
『赤色の空の果て2』

山中松竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『赤色の空の果て2』

【Nコード】

N1492C

【作者名】

山中松竹

【あらすじ】

主人公、白澤朝奈（男）とおそらくヒロイン、紀村深雪によるドタバタ物語の第二段！！二人は異端者でありながらも、異端者でないような存在。何故なら、白澤朝奈は嘘と偽りの塊であるからだ。自らもを騙す超テク！それが白澤朝奈である。

プロローグ（前書き）

この作品はインフルエンザで出来てます。感染しないように気を付けてお読みください。

プロローグ

これは偽りの話。

偽りの話でありながら真実なのだ。

嘘ではない。

いや……本当は嘘かもしれない。

つまり。

嘘か真実かわからない。

しかし、曖昧と言うわけではない。

嘘なら嘘で……。

真実なら真実。

またや、嘘であり真実でもある。

この話はそんな話だ。

そして、おそらく僕の物語である。

深雪の物語ではない。

あいつなんかの物語なのでは決してない。

僕が主人公でないはずが無い。

もし、深雪が主人公で僕が脇役なら………。

ふーんだ！

そんな話なんかに登場してやらないぞ！！

これは僕、白澤朝奈の物語なのだ。

他の人の誰でもなく僕の物語。

僕が中心に話が進む。

しかし、僕を中心に雲が進む訳ではない。

僕を中心に世界が回るわけではない。

だが僕はあくまで物語の主人公なのだ。

そう！アトム・ヒーロー！！

アムロ・ヒーローではない。

確かに奴は強かったよ。

ヒーローかもしれない。

だが間違っても主人公は僕だ。
それを間違えないでほしい。

さて、今回の話は夏の蒸し暑い刻の話。

その刻も空も青く輝いていた。

ま、空が輝くわけではないがな。

どちらかというと輝くのは太陽だ。

まあ、言葉の比喩みたいなものだ。

空が輝く。

ほら、そっちの方がカッコいいだろう？

余談はここまでにしておこう。

今回の話は四月の事件に比べて実に穏やかな話。

まあ、とにかく聞いてくれ。

最初に言っておくが質問は聞かないからな。

第一章

ああ、空は綺麗。

見渡すかぎりの青空。

うーん。

いい気持ちだ。

僕、白澤朝奈は学校の屋上に一人で寝転びながら空を見上げていた。
今は昼休み。

学生が学校が行なわれている中で一番自由に出来る時間だ。

それ以外は束縛。

授業という名の束縛。

生徒は教師には逆らえない。

生徒にとっては授業は苦痛であり捕われた時間。

そう、僕ら生徒は自由を奪われながら生きている。

教室は牢獄だ。

だから、こそ僕は思う。

今こそ！立ち上がれ！

学生という名で刻を奪われたものたちよ！！

僕らは戦わなければならない！！

何と？

それは、もちろん……………。

大人たちとだ！！

さあ、戦うのだ！！

ガーク。ガクセイ！！

……………。

無理があつたようだ。

これは僕の頭の中で起きたインフルエンザである。

しかし大丈夫、感染はしないから。
気にすることはない。

むしろ気にしないでくれた方が助かる。

まあ、ともかくだ。

今は昼休み中である。

だから、こうして空でも見上げて時間を潰しているのだ。
ん？

友達はいないのかつて？

馬鹿にしないで欲しい。

友達の千や二千は。

……………。

すいません嘘です。

そんな一杯はいません。

いるといえば、ちよつと友達とは言いたくないが、ファミレスの品
を3分の1を頼んで全額おごってくれたような奴や、ゴスロリで赤
毛の美女、ほかにも……………。

他にも……………ん。

あれ、他に誰かいたか？

思い出せない。

あれ？

少し悩んだ。

ふーむ、これはアレだ。

修学旅行で友達の好きな人当てで候補を出そうと思っても中々思い
出せないような現象だ。

実際はおそらくもつと友達がいることにしよう。

うん、じゃないと僕には変人な奴しか友達にいないような気がして
しまう。

僕は納得の顔を浮かべて、思考終了。

僕はゆっくりと上半身を起こした。
そして、ふーっと息を大きく吐く。
すると。

「白澤！！」

後ろから勢い良く体当たりを食らった。
ぐほっ！！

背骨がっ！背骨がっ！

僕は背骨が折れたんじゃないかと思うくらいの衝撃を食らった。
僕は背中を押さえながら、うつぶせになった。

「白澤、聞いて聞いて」

嬉々した声を高々とあげる声がした。

それは凄盛深雪のものだった。

ま、こんな風に後ろから突き飛ばしてくるのは彼女以外に誰がいる。
まあ、例のゴスロリ少女ならやりかねはしないだろうが、彼女では
まずない。

僕は彼女の恨みを作った覚えはないからだ。

いや……まあ、それよりも僕の心配しよう。

彼女はいったい何しに來たのだろう。

話に來たのか、痛み付けに來たのか。

「でね白澤、ニュースなのだよ！！……って。うん……」

ようやく僕の様子に気が付いたのか僕を見て首を捻る。

「何やってるの白澤。」

平坦の声で聞いてくる。

お前のせいだよ、お前の……。

僕は痛みを堪えながら、そう思った。

「ふー……。」

僕は背中が納まるまで五分程度うつぶせで無言だった。

「まったく、背中が痛いなら昨日のうちらから歯科に行っておかない

と。」

深雪は平然とそんな事を口にした。

僕は呆氣にとられたね。

原因が自覚してないなら何を言っても意味が無い、犯人が自覚なしに人を殺していたりしたら、推理する探偵も大変だろう。

それと同じである。

「あと、骨なのに何故歯科に行かねばならないんだ。深雪嬢よ。」

僕はとりあえずつつこんでおいた。

「うん……、歯と骨って似てない。」

首を傾げてとんでも発言をする。

いや、君は虫歯になったら整骨科に行くんですか。

そう問いたくなったが、笑顔で頷きそうだったので質問中止。

虫歯で来られたら整骨科の先生もびっくりだよ。

僕はそう思った。

彼女の名前は凄盛深雪。

高校一年。僕と同学年でクラスメート。

容姿端麗で誰もが認める美女。

美女のなかの美女。

白雪姫に出てくる鏡に問いたら連呼して凄盛深雪と呼びまくるほどの美女。

いや………今のはさすがに嘘が入るが、とにかく僕は彼女は美女だと主張しよう。

何故なら、彼女はただ今僕の彼女であるからだ。

彼女が世界一の美女だとなんか勝った気がするだろう。

まあ、しかし。

美女は美女でも彼女は特別な人種。

彼女は変態で変人だからだ。

彼女がトップクラスの美女なら、彼女はトップクラスの変態、変人でもある。

それはかなりの問題である。

そして、さらに重要なのは彼女は普通の人間ではないという点だ。この話はいずれ詳しく話をするでしょう。

そして、彼女は僕の彼女である。

わかりずらい言い回してだったな。改めよう。

深雪は僕の彼女である。

まあ、色々あって、今僕は深雪と付き合っているのだ。

しかし、僕は彼女を好きなのではないのだ。

つまり矛盾。

つまり、僕らは上辺ばかりのカップルなのだ。

僕はそう思っている。

深雪は違う意見をおもちのようだが。

……………。

痛みが退いて、一旦場はおちついた。

僕は、ふうーっと再度大きく息を吐いた。

大きく息を吐くという行為よりも、むしろ溜息と言ったらよいだろう。

僕は溜息をついたのだ。

そして視線を深雪に向ける。

「で、何のようだ。いったい」

僕は問い詰めるような荒い口調で聞いた。

「あっ、そうそう。ジャンジャジャン!!」

対して深雪は変わらない不動のハイテンションな口調で対応してくる。

そして一枚のチラシを広げて見せる。

「はい、これ!」

深雪から一枚のチラシが手渡された。

「なんだこれ」

感情の無い声色で問う。

「今月の学校行事なのだ!!」

勢い良く発表してくる。

ああ、うざったいなあー……。

「ふーん」

僕は気持ちを入れずに相づちを取った。

「ま、読んでみなさい、心が踊りだすわよ」

「……………」

いったい心が踊りだすとはどんな様子なのだろうか……。

ふと疑問に思ったが、こんなことにつっこんでいたらキリがない。

対深雪攻略1……深雪の惚けなんかすべて相手にするな!

それが僕が深雪と出会ってから思ったことである。

ちなみに攻略は1から100まである。

まあ、とりあえずチラシに目をやった。

チラシに目をやって、大きな見出しに注目。

注目。

注目した目が泳いだ。

何故なら……。

「さあ戦え!学校一斉サバイバルバトル!」

深雪はこのチラシの大きな見出しを口にする。

はい……………。

何ですかソレは。

僕はそんな混乱状況に陥った。

「どう。心が踊ったり、弾んだでしょう」

「……………」

僕は無言だ。

何故なら1ミリたりとも心が踊ったり、弾んだりしなかったからだ。
動いたのは眉間のしわくらいだ。

「どうよ!」

威張るように腰に手を当てて深雪が言った。

「いや、どうって言われてもな」

頭を掻いて困った顔をつくる。

「いったい何なんだ。この馬鹿げた企画は……」

僕はチラシを指で指して問う。

「見ての通りに学校企画よ」

平然と答えられた。

いや、見ても考えても、何しても判らないから僕は聞いているんだ。
というか……。

「こんな学校企画ありえないだろ！」

つつこんだ。

思いつきりつつこんでやったよ。

ここで、突っ込まないでスルーできるほど僕は悠長としてはいない。
だって、学校行事である。

何故に、誰が、どう思って、こんな意味の判らない企画になっているのか。

普通はバスケのクラスマッチだの遠足だの旅行だの、そんな感じの
もつとメジャーな感じの行事でなくてはならないはず。

いや、絶対にそうでなければならぬ！

なのに……なんだ。

さあ戦え！学校一斉サバイバルバトルとは。

マイナーもいいところである。

てか、そんなことを行なっている学校は存在するのか。

存在しないだろう……。

まず……。

いや、むしろ問題はそこではない。

そんなことを本当にしてもいいのかという問題だ。

学校がやろうしても国が許可しないだろう。

戦士育成学校か、ここは……。

そんなに戦いたいならネットゲーでバーチャル勇者にでも成ってい

ればいいだろう！

と……僕は苦情の意見を徒然と引き起こす。

「いったい考えたやつはどこのどいつだ」

僕は問う。

「うーん。たぶんミー君だと思うわよ」

少し考えた深雪は校長の名前をだした。

「……………」

なるほど……………。

その答えに僕は同意して納得した。

奈良未仁。

うちの学校の校長だ。

しかし、僕は認めない。

あんなやつを校長と認めたくはない。

何故なら、あいつは大人らしからぬ大人であるからだ。

むしろ子供だ。

忘れはしない。

あの始業式の異言を……………。

「えー、僕は今年からこの学校の校長となった奈良未仁だ」

ここまでは順当だった。

「しかし、私はフルネームよりもニックネームの方が好ましい。ミ

ーちゃんと呼んでくれ」

なぜに！？

何が楽しくて校長の呼び名をニックネームで呼ばなければならない。

この時点で会場がざわついたよ。

「えー、新入生の諸君。入学おめでとう」

この発言も適切。

しかし直ぐ様。

「しかし！私は君らのことなんてどうでもいい。好きにしまえ。」

私が興味があるのは格ゲー、シューティング、音ゲーの極めた奴だ。私はこう見えてもゲーマーでよくゲームセンターに行く。あそこは私の城だよ。君たちも訪れたら声をかけてくれたまえ」

会場中は混乱。

大混乱。

あれは何だ！と口にする奴もいた。

それもそのはずだ。

生徒に向かって教師が、それも校長が、どうでもいいとか普通は言わない。

絶対に言わない。

おまけに、ゲームの話なんて振らない。

一応、校則の第五項にはゲームセンタ、カラオケ等の立ち入りは禁止と書いてあるのに逆に勧めるなんて……。

「さて、今年の指導目標だが」

会場中が注目。

一点、校長を見つめる。

「自由に生きる生徒像がある」

おっ、なんか少しまともかなと思いかけた。

「自由！！バイクを盗んで！教室のガラスを割って……………おい

！何をする！放せ！！放さんか！」

男教師数名により強制退席。

以後、教頭が詫びて校長の言葉を代わりに語った。

それが四月の始業式の出来事。

今の話しから解るように校長らしからぬ校長が今のうちの学校の校長だった。

はつきり言って、あんな奴が校長に成れるなんて、この国も終わったなと思ったよ。

第一にあの校長は年齢がまだ四十無いくらいの歳をしてそうなのに校長なんておかしい。

失礼だが、教頭のほうが今にも倒れそうで校長ぽい…………。

それが僕が抱く校長、奈良未の印象だった。

「なるほど……あいつなら考えそうだ」

僕は言った。

「なんでも、一学期に一回はイベント起こすらしいよ」

「……………」

あいつはこの学校を潰したいのだろうか。

生徒達もびっくりだろうに。

この学校は去年までもともと真面目で延び延びとした学校であった。それがいきなり……これでは騙された感がMAXなのだが。

「あははっ、ミーちゃんさすがだね。おもしろいことを考えてくれるよ」

深雪は本当におもしろそうにゲラゲラと笑った。

「おもしろくねえーよ……………」

僕は疲れたような声で呟いたのだった。

「まあ、いい。校長の話はどうでもいい。あいつのことなんて考えていてもしょうがない。むしろ考えたくない」

正直で率直な思い。

あんな校長なんて、むしろいらないと、すら思えてくるくらいだ。

「うわっ、ミー君が可哀相」

深雪はそんなことを口にする。

彼女が言っているミー君とは奈良未仁の奈良未の未を取って付けたニックネームだ。

ちなみに考えたのも他の誰がと言うわけでもなく深雪である。

あの校長の言ったとおりにニックネームで呼んでいる奴など深雪を含めて指の数だけいるかいなかくらいだろう。

「あんなやつのことをミー君って呼ぶな」

とりあえず訂正させる。

「えー、なんで。いいじゃん。ミー君」

「僕が許可しない」

「なんで」

「なんででもだ」

「白澤の意地悪」

「別れるか……」

「ならミー君って言うの辞める」

「どうやら深雪も心地よく従ってくれたようだ。

よかった、よかった。

おっと……。

けして僕は何かで深雪の気持ちを引いたりしたわけではないからな。

「でだ……そろそろ本題に入るか」

僕は無駄な話を切り上げる。

「その……なんだったか。なんとかサバイバルの話なんだけど……」

「さあ戦え！ サバイバルバトル！？ のこと。それとも全世界一斉脱衣麻雀選手権のこと。」

「サバイバルバトルの方だけど……」

てか後方の答えはいったい何を参照にして口にしたのだろうか。

全世界一斉脱衣麻雀選手権……。

名前だけでも異様なのだが……ぶっちゃけ、少し見たかったりもする。

いったい何が起こるんだろうか。

「で、その『さあ戦え！ サバイバルバトル！？ 』って奴だけど、ルールはいったいどんなルールなんだ」

ぶっちゃけ、話を聞いたときからイメージが浮かばなかった。

まるで、さっぱりとイメージできない。

だって本当に意味がわからないのだ。

仕方がない。

「ルール……さあ、私もよく判らない。チラシにはルールは当日に

発表します。って書いてあるわよ」

深雪がチラシを眺めながら答えた。

「なんだソレは……。他には何か書いてないのか」

僕は首を傾げて言った。

「他に……えっと……。実行日は5月10日の午前10時からで」

日にちを発表する深雪。

今日は8日だから明後日にあたる。

けっこういきなりだな。

「あと……参加、不参加は自由」

「ん」

僕はここぞとばかりに反応した。

「もう一回、リピート」

「さあ！戦え！！」

「いや、それじゃなくて……今さっき言った言葉だ。参加は自由みたいなことを言わなかったか」

「うーん、気のせいじゃない」

深雪はとぼけてみせる。

「ちよっと、そのチラシ貸せ！」

僕は深雪から、横から殴るようにチラシを奪い取った。

あっ！っと深雪はしまったと言わんばかりの表情をする。

「女性のものを奪うなんてマナー違反よ！」

抗議の声が聞こえるが、気にしない。

そのままチラシに目を向けて読む。

「えっと……参加、不参加は自由」

学校行事なのに参加は自由なんだ……。

意味解んねえ。

こんな規制を作ったら、おそらく出てくる人間も限られるだろう。ま、でも有り難い規制であるので反論はまったくくない。

「てっ、ちよっと！」

すると深雪が声を張らせて言った。

「まさか白澤ってば出ないつもりでしょう!!」

まさか……………か。

まさかと言わず……………。

「当たり前だ」

僕は笑みを作って当然のように答えた。

「何を言っているのかしら。白澤、あなたが今やろうとしているのは過ちよ!! 過ち。好きな娘が告白してきたシュチュエーションで間違って交際の申し出を断るくらいな過ちよ!!」
よく、わからないが、それは凄く虚しい過ちだな。

「だから私たちは聖人として正しき道を進まないといけないのよ」

「このイベントに出ることは果たして正しき道か」

「もちろんよ! とにかく! せっかくの学園行事なのよ! 出ない道は無いわよ」

力説をする深雪。

ま、深雪の言っていることがわからんでない。

確かに高校生活を有意義に過ごすならイベント参加は不可欠要素である。

有意義に過ごしたいならだ。

しかし、僕の高校生活は変態と付き合ってしまったため既に有意義さが無くなっている。

「……………。ふー、まだ抵抗するってわけ!」

素で疲れたように息を吐いた。

まあ、そうがんばるな。

僕はそう言いたい。

しかし深雪はがんばる。

ふふっと笑ってみせる。

「ならば奥の手よ!!」

そう言って深雪はチラシを奪い取って僕の顔の目の前に突き付けた。僕は反射的にびっくりして顔を引っ込める。

「最後のところを呼んでみなさい」

何かに勝ち誇った様子で深雪は言った。

「最後のところ……………」

僕は渋々と言われたとおりに最後の行に書かれた言葉を拝読した。

「えっと……………この『さあ戦え！サバイバルバトル！？』の優勝者には、この学校の全権利を有する……………」

僕は読み終えた。

読み終えて哑然。

おい、糞校長……………一カ月で学校最有力権利を放棄していいのか。と、僕は思う。

「ねっ、いい話じゃない。勝てば、この学校は自分のものよ！」

「……………」

確かにいい話である。

しかしだ。

あまりに美味しい話であるが為に怪しすぎる。

「ええい！今更！何を悩んでいる！！」

深雪は吠えた。

「戦ええええええええええ！！」

声は校内中に響き渡る。

非常に恥ずかしい。

何故に深雪でなくて僕が顔を赤らめないとならないのだ。

「……………」

悩んだ。

「……………」

悩んだ。

その結果。

「はあ、仕方ない……………。わかったよ」
承諾した。

すると深雪はチラシから手を離していきなり抱きついてきた。

「さすが白澤！！」

急の行動だった為に、避けれず。

ましては受けとめ切れずに後ろに倒れた。
いてっ！

軽く腰を打った。

「あははっ、白澤、ラブ。ラブ、ラブ！ラ・ブ」
幸せそうに顔を擦り寄せてくる深雪。

この仕草はやばい。

反則的に可愛い。

まじで卑怯だった。

猫のように戯れてくる深雪。

まったく……顔だけはいいんだから仕方ない。

僕はその状況をしばらくじっとしていた。

学園イベントか。

まあ、いくらサバイバルバトルだからといって危険なことはないだろう。

僕はそう思った。

そして風が強く吹き抜けていった。

落ちていたチラシは風に乗って飛んでいく。

ああ、この刻にもっとしっかり見とくべきだった。

チラシを最後の最後まで、しっかり呼んでおくべきだったのだ。

『※注…非常に危険なイベントです。よく考えて参加してください。』

』

最後の最後に小さく書かれていた、その言葉に…………。

第二章

深雪から妙なイベントの話聞いた、その後。

深雪と別れて教室へと向かった。

ちなみに深雪はというと『今日は私は授業でないから』と僕に伝えて保健室へと眠りに行った。

僕から言わせてもらえば『今日は』ではなく『今日も』だろうと、そう言っただけだ。

まあ、いつものことだし、さほど気にはしない。

それに、あいつには授業単位が足りなくても進学できる特権があるらしい。

詳しい話はよくわからないが。

僕はそんなことを考えていると、いつのまにか教室にと着いた。

教室の戸を開けて中に入る。

教室内は以外にも静かであった。

もつとこう、あの妙なイベントの所為で盛り上がっているのを想像していたのだが。

僕は期待を裏切った教室に入る。

すると。

「よっ、朝奈」

教室に入る僕に話し掛けてくる声が聞こえた。

声主の方を見ると、そこには須原滝がいた。

ちなみに紹介しとくが、こいつがファミレスの4分の1の品を一边に頼んだ奴である（まあ、頼んだのは深雪であるが）。

一言で言えば、利用されやすい、可愛そうな友人である。

「おう」

僕は少し遅れてあいさつを返した。

「昼休みはまた紀村さんと屋上でイチヤイチャしていたのか」

からかうような口調で滝は言ってくる。

ちなみに言うとなんと僕と深雪が付き合っていると言う噂は今では学内中に響き渡っている。

何で広まったのだろう。

まあ、深雪は校内トップランカーの美少女であるから、それなりに恋人の把握はしてあるのだろう。

当たり前といえば当たり前であるが。

しかし、あれは決してイチャイチャするような仲ではないな。

どう見れば僕と深雪はイチャイチャしているような仲に見えるのだろうか。

まったく人の目と言うのは不思議である。

まあ、それに何より滝ごときにニヤニヤと笑われるのは不愉快だ。非常に不愉快である。

この顔を殴り飛ばしたいね。

ま、冗談だけど。

「そんなに羨ましいなら代わろうか」

「本当かよ！」

喜びの反応を見せる滝。

「お前に深雪を説得できるなら喜んで代わろう」

「なんだと！——」。そんなの無理に決まっているじゃないか」

自信満々とそう述べる。

途中の間には、いったい何を想像したのであろう。

「ヘタレめ」

「なんとでも言え！だが最後に笑うのは俺だ！」

「そうか——」

可哀相な奴である。

いったい、どれだけ未来に期待しているだろうか。

現実をすべて捨てて、いつ来るか判らないような、遠い未来に夢を抱いてやがる。

なんだか、一緒にいるこちらまでも悲しくなってくるではないか。

「でも、実際に紀村さんとはどうなんだよ。仲良くやっているのか」
「お前は僕のおふくろか――。いったい、なんで、そんなことを話さないといけないんだ」

「まあ、そう言うなよ。だって紀村さんは間違っても校内トップクラスの美女だ。そんなのと付き合っているお前との仲を知りたくて何が悪い」

「全て悪い」

僕は坦々とした口調で言い返した。

「まあ、そう言うな。俺とお前の仲だろ」

「いったい、どんな仲だよ」

「親友だろ」

「在り来たりだな」

本当に在り来たりな言葉だ。

僕は滝を見て微笑してみた。

「くっ。お前を一瞬たりと信用した俺が馬鹿だったぜ」

「いったい、何時、どこで、何が、どうしたことによって僕は信用されたんだろうか。」

「つまり紀村さんとの仲は誰にも話さないつもりなのか」

いや、お前以外には話してもいい。

と言ったら、こいつはどうするであろうか。

一瞬考えたが、さすがにそこまでおちよくるのは辞めておこう。

「まあ、ぼちぼちだ」

僕はそう答える。

すると――。

突然である。

しゃきんっ！

しゅっ！！

僕の真隣に刃物が振りぬかれた。

刃物は刀。

刃渡りは、長い。

刃渡りを辿って持ち主へと目をやった。

それは、よく知る人物、橋場リサ様であった。

えっ、なんで様付けなのかって――。

そんなの決まっている。

僕は彼女には勝てないからだ。

橋場リサ。

彼女は混血。

いわゆるところのハーフである。

父親は日本人で母親がフランス人らしい。

非常に頭が良くて、非常に運動ができる。

おまけに、顔のできがまた二まわりも、三まわりも優れており、絶大の美女。

赤色と黄色の混じったような髪の色は顔と一致して、かなりの見栄えである。

普段はじっと席に座っていて何も話さないの『幻の人形』（シークレット・ドール）と影で呼んでいる人もいる。

今僕の意見からすると『シークレット・ドール』よりも『ザ・ダークネス・ドール』である。

彼女には汚点なし、欠点なしなのだけど、あえて一点だけ指摘しよう。

汚点ではないが、彼女の服は黒と赤のヒラヒラしたロングドレスのような服なのだ。

いわゆるゴスロリ。

なぜかゴスロリ。

無論、学校でも平然と着ている。

しかし、うちの学校は私服制ではなく制服制。

深雪もちろんのように制服を着ている。

私服なのは彼女一人だけである。

何故それが彼女だけOKなのかというと。

そんなの決まっている。

可愛いからだ。

可愛いからOK!!

それ以上でも、それ以下でもないはずだ。

これは暗黙の了解なのだろう。

だから誰も気にしない。

気にしているだろうが、指摘しない。

しかし、そんな橋場さんがどうやら今は怒っていらっしやるようである。

「やあ、橋場さんじゃないか。こんにちは」

僕はとりあえず挨拶をした。

「橋場さん、こんにちはっ——って!ぐはっ!!」

滝は僕同様に橋場さんに挨拶をしたが、挨拶をした直後に殴り飛ばされた。

「滝くんは黙っていてください。邪魔ですから」

橋場さんは教室のドアの前に倒れこんだ滝に鋭い口調で言い付けた。

「ひゃい——」

滝は泣きながら返事をする。

ああ、滝。

可哀相な奴だ。

僕はそんな滝を目にして黙って哀れんでやった。

そして滝から目を離して、刀をお持ちの橋場さんに目をやった。

「えっと——。なんですかね。そんな怖い目をしないで下さいよ」

シークレット・ドールの名が泣きますよ。

僕は心のなかでそう続けた。

「白澤くん——」

橋場さんは僕の名を呼んだ。

「はい」

僕はすかさずに返事をした。

「切ります！」

彼女は刀先を僕に向けて、そう言ったのだった。

「はい——？」

あれれ、聞き間違えだろうか。

彼女の口からおかしな言葉が発される。

しかし、それは聞き間違えでも、冗談でもない。

彼女は刀を再び振り切った。

「うっ！ ちょっ！ うわああ！」

反射的にすかさずにかわした。

最初の一刀目は威嚇であったが、今のは本気で僕のからだを狙っていた。

僕が避けなかったら真っ二つであっただろう。

って——冗談じゃない！

「避けましたか。ちっ」

悔しそうに舌打ちをする橋場さん。

「うっ！ まじで、ありえないですから」

僕は大声を出した。

教室内は既に、みんなこちらを見ていた。

そして、ちょうど良くナイスタイミングで次の授業の担任が教室内へと入ってくる。

「ほら、橋場さん。早く席に着かないと授業が！」

「問答無用です。先生、少々身内ごとがありますので先に授業を始めていてください」

橋場さんは先生に向いて、そう告げた。

先生はと言うと

「お、おう、わかった」と戸惑いながらも答えた。

わかったじゃない！！

みんな止めるよ！！

あれは真剣ですよ！

いや、真剣と本物の剣をかけていりわけではない。

偽物じゃなくて本物の刀ですよ。

僕は殺されようとしているのですよ。

「安心してください。腕と足を切り落とすだけですから」

ああ、なんだ腕と足を切り落とすだけか――。

って十分危ないですから!!

「嫌ですよ。理由を答えて下さいよ」

「問答無用です」

しゃきん!

刃の音が鳴る。

僕はとりあえず、もうダッシュで逃げ出した。

教室のドアの前にいる滝に目を向けずに踏み台にして廊下に飛び出した。

「ぐえっ!」

滝が声をあげる。

「待ちなさい!」

続けて橋場さんが滝を踏み付ける。

「ぐえっ!!」

滝はまたも情けない声をあげた。

滝よ――すまん。

僕はそう思いながら必死に廊下を駆け出した。

逃げ出して、到着した先は屋上であつた。

何も考えなしに逃げ回りすぎた。

逃げ場はもう無かつた。

しゃきん!しゃきん!

刀が鞘と擦れる音が下からやってくる。

橋場さん、あなたはターミネーターかなんかですか!!

そう、つつこんでやりたくなった。

「ふう、鬼ごっこは終わりです。おとなしく腕を切り落とされなさ

い」

「嫌ですよ。いくら、あなたの頼みでも」

「何ですか」

「てか、本気ですかって、こちらが聞きたくなりますよ」

「黙りなさい！あなたは私の深雪を奪ったんですから！」

そう――。

なんで、さっきから僕が追われているか。

その理由は深雪にあったのだ。

率直に言くと、橋場リサはレズビアンなのだ。

しかも、相手はあの紀村深雪。

つまり、現時点では僕の彼女。

「あなたが奪ったんだ」

まあ、そういうことになる。

いや、違うか――。

深雪は別にレズビアンでもなんでもないので奪ったとか、そいいう話はならない。

単に僕が先に深雪と付き合ってしまっただけ。

しかし。

僕は別に深雪と付き合いたいわけではない。

無効が半ば無理矢理に付き合うようにしてしまったのだ。

だから僕は無実である。

そう、橋場さんに言ってみた。

「ほう――」

橋場さんは何かわかったかのようにつぶやく。

「つまり、僕は深雪を好きなのではないんだよ。信じてくれ」

「つまり、深雪とは遊びだったと」

「そう――だ。ん――？」

嫌――。

なんか違うぞ。

「この女の敵め！」

すると橋場さんは刀を突き付けてくる。
僕は避ける。

しかし、横髪を擦り、髪が少しだけ切り落ちる。
危ない。

非常に危ない。

今更に思うが、彼女は何者なのか。

なんで刀なんて手にしているのだろう。

一カ月前に出会った猫耳マントのロリ少女もまた刃物を所持していたが、この国は何時から刀の所持と使用が許可されたのだろう。

今は戦国の世ではない！

もうすぐ巨大ロボットでの戦いが主流に成らなければならない世の中のはずだ！！

少なくとも僕はそう思っている。

何故なら、ロボットに憧れているからだ。

なのに刀だ！

ありえないって――――。

色々と――。

って、そんなことを考えている場合ではなかった。

「ふん！はっ、とう！」

ゴスロリのひらひらした赤いスカートがなびく。

それと同時に刀の刃が襲い掛かってくる。

僕は避ける。

避ける。

避ける。

が――。

がつん！！

屋上のフェンスに背中が打ち当たった。

「――」

僕は笑顔で笑う。

「ふっ」

橋場さんもまた、笑顔を作る。

あ、可愛いな。

って、今はそんなところではない。

橋場さんの笑顔は可愛く、国宝級だが、命には変えられない。

「もう辞めときましようよ。その辺で——」

この先は洒落になりませんよ。

「ふふっ」

しかし、橋場さんは変わらず刀を持ち続けている。

「——」

うーん、困った。

もう、こうなったら仕方がない。

「判りました」

僕は低い声で呟いた。

「ようやく、やっと観念しましたか」

橋場さんは喜ぶ。

あなたは完璧なエスですね。

そう言ってやりたかったよ。

まあ、言わないけど。

「ええ、ですが。腕が無いくらいなら、死んだほうが増しです。な

ので僕はここで死にます」

僕はそう言った。

「はっ——」

橋場さんは驚きと困惑の表情。

「つまり僕は死ぬんです。安心してください。ここから落ちて死にますから。橋場さんがやったことにならないし、その手も、その刀も血で汚させません。僕一人で死にますから」

橋場さんは何を言っているんだ。

そういう目でこちらを見つめた。

僕は笑った。

そしてフェンスをよじ登ってフェンスの向こうに出た。

つまり、足場ほぼ無い状態。

滑らせれば、そのまま地上に落ちてジ・エンド。

「ちょっと！なにやってるの！！」

橋場さん慌てる。

本当に混乱したように慌てる。

まさかの僕の行動に慌てる。

しかし、そんな橋場さんを裏腹に笑った。

笑って——、笑顔で。

「それでは橋場さんお元気で。滝と深雪にはよろしく言うておいてください。後は——。他に伝えてほしい人は残念ながら思いつきませんね。では」

僕はそう言って橋場さんを見た。

「白澤くん！やめっ——！」

彼女がそう言おうとした瞬間。

僕は足を少しずらして落ちる。

「白澤くん！！！」

彼女は僕の名を呼んでフェンスへとぶつかった。
がしゅん！

場が静かになった。

「白澤くん——」

橋場さんは力無く僕の名を読んだ。

「そんな——。そんな、つもりは無かったのに」

彼女は言う。

そしてポタリと涙が流れる。

「くすっ、くすん」

可愛い泣き音をあげる橋場さん。

「くすっ、白澤くん——ごめんなさい——。だから——戻ってきてよ」

彼女は屋上のコンクリートに跪いてそう言った。

「はい。わかりました」

僕はそう答えた。

「——。そう、くすん——よかった。————。って、ん？」

橋場さんは首を捻った。

そして涙を拭いて立ち上がり、フェンスから下を見下ろしてくる。

「やっほー」

僕は手を振った。

「——」

橋場さんは無言だった。

「よっこらしょ」

僕はゆっくりとフェンスをよじ登って橋場さんの目の前に立った。

橋場さんと言うと、さきほどから、ずっと哑然とした顔を維持したままだ。

それも、そうだろう。

飛び降りて死んだと思っていた僕が生きているからだ。

しかし、死ぬわけにはいかないんだ。

僕としては死ぬつもりなんて、さらさらないのだから。つまりだ——。

「あれは嘘だったんだよ。死ぬって言ったのは嘘。本当は死ぬ気なんてない」

「嘘——死ぬ気なんてない」

橋場さんは繰り返して唱える。

まるで精神の無い人形状態のように。

「そう。屋上はよく来るからね。構造は知ってたんだ。フェンスの向こうには1メートルくらいの高さの段差があるんだよ。つまり最初から飛び降りと見せ掛けるつもりだったんだ。どうだった。びっ

くりした」

僕は笑ってそう言った。

「ぐすん——」

すると以外にも橋場さんは涙を再び流し始めた。

「橋場さん——」

これには、さすがに僕も驚いた。

まさか、あの橋場さんが人前で涙するなんて信じられない光景を見てしまったからだ。

「しっ、心配したんですよ。ぐすん、死んじゃったと思ったじゃないですか!!」

怒られた。

しかも殴られた。

以外にもクリーンヒットしてしまった。

殴られたのではない。

橋場さんの言葉にだ。

以外にもやさしい一面があるようだ。

しかし、やってはいけないことをやってしまった気がしてしまう。

「いや——」

しかしだ。それ以上に困るのは——。

中々、泣き止もうとしない橋場さん。

「あの橋場さん——?」

「ぐすん、くすん」

「橋場さん——」

「くすん」

「すみません。ごめんなさい。だから泣き止んで下さい」
すると。

「誰が泣いているんですか」

いつもと顔色一つ変わっていない橋場さんが顔を起こした。
あれ——。

「私が泣くとも思いますか」

やられた。

僕は頭を抱えた。

どうやら、嘘泣きのようだ。

「そりゃ、人は生まれたときは泣いて生まれるらしいですから」
僕は言った。

「つまらない屁理屈ですね」

橋場さんが答える。

「理屈は好きじゃないですからね」
僕は答える。

「そうですか。確かに女は理屈臭い男は嫌いですよ。でも、屁理屈男も私は嫌いですね」

橋場さんは

「ふん」と顔をそっぽむける。

「なら何がお気に召されるんですか」

「そんなの決まってますよ」

当然と言わんばかりに言った。

「男は嫌いです。私が気に入るのは紀村深雪だけですから」
「――」

予想どおりの答えが返ってきた。

「ふー。何がいいんですか深雪の」
僕はため息をついた。

「全てです」

速答であった。

「そうですか」

ああ――できるなら深雪をそのまま、この人をプレゼントしてあげたいくらいだ。

深雪は僕には手の内に大きすぎて収めきれないからな。

「白澤さんと深雪が付き合って一ヵ月です」

すると橋場さんが口を開いた。

「私は色々と考えましたよ」

色々とは何ですか。

まさか、僕を暗殺とか言うんじゃないでしょうね。

僕は言った。

「よく判りましたね」

なんか当たってしまったし――。

しかし、なるほど。

ここ一カ月、妙に殺気を感じるとは思ったよ。

それは橋場さんの殺気だったのか。

「だけど、あれですね。そんな細々した事では深雪は振り向いてくれませんしね」

はあ――と溜息をつく橋場さん。

「だから提案があります！」

「提案ですか」

「そう提案です」

「何ですかね。その提案とやらは」

できれば簡単かつ楽な提案にしてくださいね。
と、思いはしたが口にはせずに黙っておく。

言ったら、今度こそ切られそうだし。

「そうです。私が考えた提案は」

橋場さんは言った。

手を伸ばして僕を指差して――。

「勝負です!!」

「――」

場が静まり返った。

しかし、それは一瞬だった。

「はあ――」

僕の間の抜けた声が口から出た。

「勝負――。ですか」

「そう勝負」

橋場さんはやる気たっぷりの笑み。

「今からですか」

僕は恐る恐る問う。

しかし、これには首を振ってくれた。

「勝負は今日ではないです。今日の勝負はさきほど終わりました。今日は私の負けでいいです」

「そうですか。なら、いつ勝負するですか」

「勝負は今月のイベントです。知ってますよね」

橋場さんは問いてくる。

知ってるものにも今さっき聞いた話だ。

それに、あの題名では嫌でも覚えてしまう。

「はい、一応知っていますよ」

いやいやながら頷いた。

「なら好都合です」

僕は不都合です。

「あのイベントで勝ったほうが勝ちで、深雪により相応しい者として認めることにしましょう。しかも、このイベントの優勝者は校内最高権力が与えられるらしいです。深雪の相手には相応しい称号だと思いませんか」

嬉しそう笑う橋場さん。

いや、どこが。

僕はそんな顔をしていただろう。

深雪に相応しいのは、そんな校内ナンバーワンみたいな奴よりも普通の変人の方がお似合いだ。

深雪も変人好きだし。

その点では橋場さんも常識人から外れてあるし、それなりに評価高いんじゃないか。

僕はそう思った。

ちなみに僕は結構な常識人だと自分では自負している。

よって僕は深雪には向いてない。

深雪が僕に興味を持ったのは、きっと何かの手違いだったはずだ。

「ふうー。まあ、いいですよ。その勝負、乗りました」

僕は答えた。

どうせ深雪がうるさいから出なければいけないものだったし、ちょっといい。

しかし、僕は勝つつもりはまったく、さらさらないが。

潔く負けて、深雪を橋場さんに譲ろうではないか。

うん、それがいい。

僕は一人で納得した。

「決まりです。なら覚悟を決めておいてくださいね。深雪が私の物になったときに喚いても返しませんから」

大丈夫です。

いりませんから。

と間違っているいいそうになったが、橋場さんの目の前でそんなことを言ったら切り落とされる。

しかし、なんだ。

深雪には悪いが、なんか物みたいな扱いされているような気がして堪らない。

ま、あいつならそれくらい笑ってくれるはずだ。

おそらくね。

「じゃあ、話は終わりです。早く、その刀をしまつて下さない」

僕は橋場さんの手に持つ凶器を指差した。

「――」

橋場さんは名残惜しそうに刀を見た。

そんなに切りたかったんですか、あなたは。

あなたは血に飢えるハンターですか？

そう言ってあげたくなった。

橋場さんは刀の先から根元を確認するように見た後、鞘にしまい込んだ。

「ふー」

僕は息をついた。

安心の意味の息だ。

ゴスロリ少女はぷいと顔を背ける。

また、気を強がる仕草が愛らしく感じる。

「では失礼します」

そう言うと、くると半回転して屋上から出ていった。

ひらひらの服が風に舞うとかなりいい絵になる。

それを後ろから眺め終えた後に僕もその場を後にした。

第三章

一日が過ぎて、今日は九日。

ちなみに明日が学園イベントの日である。

つまり、今日は学園イベント前日だ。

僕はそんなことを、いやいや思い出して目を覚ました。

部屋には、もちろん僕一人。

誰も他にはいない。

だから無音。

家の中も、また無音。

何故なら、僕は一人暮らしをしているからだ。

僕の住まいは学校から少し離れたアパートである。

しかし、普通の共同アパートではなくて一軒家のアパート。

借家とも呼べるかもしれない。

実際に、それなりに金が掛かっている。

だから生活は少々困難なものである。

しかし、だからといって普通のアパートにするのは嫌だった。

僕はあまり他人と接して過ごすのは得意じゃない。

いや———。

嫌いと言ったほうが正しいか。

だから一軒家の貸家に住んでいる。

えっ———親。

親か———。

そんなの僕の知ったことじゃない。

今では、親は保険金へと移り変わっている。

そして、僕はあんなやつらのことは当の昔に忘れている。

あんな———。

死んでいった奴らのことなんて。

僕が知るか――。

「ふー」

息をきつそうに吐いて、僕はベットの从上から起き上がった。
すると――。

ピンポーン。

インターホンの鳴る音がした。

僕は頭をかいて、こんな朝っぱらから誰だと玄関に向かった。
まあ大体、大方、予想はついているけど。

こんな朝から家に押し掛ける非常識はあいつくらいだから。

僕は重い足取りで体を運ぶ。

ピンポーン。

再び鳴る。

ああ、わかったら黙ってろ。

僕は、そう怒る。

ピンポーン。ピンポーン。ピンポーン。ピンポーン。ピンポーン。

ピンポーン。ピンポーン。

嫌がらせのような、悪戯なような7連打。

ああ！うるさい！

この時点で誰なのか確定した。

「うるさいな！深雪！」

僕は扉を開けて文句を言った。

しかし――。

って、あれ――。

僕は呆気にとられた。

まさか、こんな結果は予想外、想定外。

そこには、むすつと顔を膨らませた少女がいた。

少女の服装は赤と黒。

ふりふりのロングスカート。

もう、これで誰かわかったはず。

そこには橋場リサが立っていた。

「――」

「――」

えっと――何。

橋場さんは無言。

無言で口を膨らませて、こちらを上目で見つめてくる。

「えっと――。こんにちは」

僕はとりあえず挨拶をした。

「――」

橋場さんはノーリアクション。

しまった！

なんか出だしを間違えてしまったか！

「ふん――。こんにちわではなくて、おはようじゃないんじゃないんですか」

ああ、なるほど。

そういう間違えか！

「まあ、とりあえず。おはよいございます。白澤くん」

橋場さんは丁寧な頭を下げた挨拶をしてくる。

あつ、はい。と――おどおどしながら僕も頭を下げる。

てか、なんだ。

本当になんだ！

クラスメートが朝から家にやってくるシュチュエーション。

それを考えてみる。

――。

僕が即座に思う回答は一つだった。

恋愛シュミレーション！

恋愛シュミレーションⅡ夢、偽りの世界。

そうか！これは夢、偽りの世界なのか！

夢なのか！

なんだ、僕はまだ寝ているのか！

おかしいな。僕はあんまり夢を見ないタイプの人なんだけどな。僕は自分を殴った。

いたっ！

痛い！夢じゃない！

「何してるんですか」

橋場さんは、自分の顔を自分で殴っている僕を見て聞いてくる。

いや、いや——。

「何しているかって、僕が聞きたいところですよ」

僕は問い返した。

「何って——」

すると橋場さんの顔が一瞬で赤くなった。

なっ、何だ。本当に意味がわからない。

「えっと——たまたまです！通り掛かったら、ちょうど白澤くんちがあったから！」

「いやいや、どういう偶然ですか。よく、この家の白澤が僕だと思いましたね。白澤って若は他にも沢山あるでしょう。なんでうちを知ってるんです？」

「くっ——！！私に判らないことは無いんです！！」

「——」

あなたは神ですか。

今ここに、ゴスロリの神様が現れた。

そんなことは無い。

本気で何しに来たのか気になるとこだが。

とりあえず——。

「中に入りますか」

僕は橋場さんを家の中へと招待しようとする。

「むっ——。変なことをする気じゃないだろうな」

念のために橋場さんは釘を挿してくる。

「そういう男に見えますか」

「うむ」

あつさりと頷かれてしまった。

これは、これで結構シヨックである。

「何もしませよ」

このゴスロリ服に誓いましょう。

「うむ——。なら少々、お邪魔させて貰おうか」

そう言うのと橋場さんは靴を脱いで中へと家の中へと入る。

普通に中へと入る橋場さん。

本当に何しに来たんだ。

友達の家を家庭訪問か——。

僕はとにかく訳がわからないので何度も首を捻りまくっていた。

ちなみに橋場さんの今日の靴は黒い革の靴の先端にバラの花のよう

なものが付いていた。

いったい、どこで買ってきたものだろうか。

少し気になった。

そこでも、また首を捻る僕がいた。

捻りすぎて、首が変になってしまいそうだ。

—————。

うーん。異様だ。

本当に異様に見える。

見えてしまう。

今、現在——朝の七時前。

僕はリビングにいて、テーブルに座っている。

そして——。

その向かい側には橋場さんが座っている。

その光景は、僕の目に合わない。

どう考えても異様に見えてしまう。

「えっと————」

僕はぎこちない口調で話し掛けた。

「本当に何しに来たんですか。まさか腕を切り落としに——とかじゃないですよ」

「ああ。それもいいですね」

橋場さんは、なるほど手をポンとたたいた。

いや、よくねえよ！

そう言いたかった。

「で、実際の理由は何ですか」

「そうですね。理由が無ければ友達の家に来ては行けないんですか」
橋場さん首を傾げた。

「いや、いけなくは無いけど」

僕は途中で口を籠もらせた。

いけなくはない。

別に橋場さんなら大歓迎だ。

盛大に祝って持て成したいくらいです——が。

しかし、なんで朝っぱらからやってきたのだろう。

しかも、今日は平日である。

「橋場さん。友達なら誰の家でも行ったら危ないですよ」

僕は一応、この非常識娘に注意を言う。

滝なら襲いますよ。

まあ、橋場さんなら三秒で返り打ちですけど。

僕は心のなかで言った。

すると、橋場さんはこちらを見て目を細めた。

「私が友達ならホイホイと家に上がり込むように見えますか」

「————」。いいえ、見えません」

少し考えた後、僕は答えた。

「白澤くん。あなたが私をどう思っているか知りませんが、私はあなたが思っているよりも安い女では無いんですよ」

橋場さんは言った。

いや——。

僕は橋場さんのことをいつ、どこで、安い女と言いましたか。

僕は、そんなこと一辺たりとも思っていないですよ。

むしろシークレットの名の通りに稀少な存在。

高すぎて手の届かない人だと思っっているくらいですよ。

僕は心の中で思った。

「白澤くん。私はですね。深雪の一見が無ければ私はあなたを普通に友達と呼んでいるでしょう。しかし、深雪の彼氏である以上はあなたは敵であり、殺す候補のトップランカーです」

「————」

あれ————。

以外だ。

「僕はてっきり嫌われていると思いましたよ」

「嫌いですよ。深雪の彼氏であるかぎり」

「あつ……はあ。そうですか」

で、結局は彼女は何がしたいのだろう。

僕は考える。

「つまり————。深雪と別れろと」

「いいえ。そんなことは言っていない。深雪に相応しい人物は明日どうせ判りますから。今日は別に別れろと言いにきたんではないです」

「なるほど。なら、何しに来たんですか」

「暇つぶし————。と言うことでいいじゃないですか」

そうですか。ずいぶん朝早くからお暇なようですね。

僕は思った。

そして一旦会話は止まった。

「————」

両者、向かい合って無言である。

あつ、なんか気まずいな——。

「あつ、ところで今何時ですかね」

僕は聞いた。

とりあえず思いついたことを口にしてみた。

しかし。

「知りませんよ。自分の家でしょう。時計の場所くらい把握してください」

当然の反応で怒られた。

僕は小声で

「はい——」と返事をした。

返事をして時計に目をやった。

時刻は七時十分程度。

まだ学校に行くには早い時間帯である。

「ところで、今日は学校は」

「行きますよ。当たり前じゃないですか」

「今日も制服じゃないんですね」

「ええ」

「てか、前々から思ってたんですが、なんでゴシックローリータな服装なんですかね」

僕はさりげなく聞いてみた。

長年の疑問をやっと問いた。

まあ、出会って一カ月しか立っていないから長年ではないけど。

すると、橋場さんは

「これですか」と服を軽く摘んで言った。

はい、それですよと答える。

「ゴシックローリータって言うんですか」

何故か首を捻った橋場さん。

「そうですよ。知りませんでしたか」

「初耳です。これがゴシックローリータですか。私は単に動きやすいから着ているだけです」

橋場さんは答える。

どうやら自分の着ている服のジャンルを知らなかったらしい。

しかも、理由は動きやすいから。

いや、あんなふりふりした格好は果たして動きやすいか。

いいや、絶対に動きずらそうだ。

僕は

「そうですか」とだけ答えて、後は何も言わない。
決して、

「どこが動きやすいんだ!!」みたいなつつこみはしない。

そんなことを僕が考えていると。

「グッドモーニング！白澤！」

扉が開いて勢い良く深雪が登場した。

どこから入ってきたのだろうか。

鍵は閉めておいたはずだぞ。

僕は深雪を見るなり顔を歪めた。

「やつほー、ってあれ。リサがいるなんでりゃ」

深雪はテーブルに座っている橋場さんを見るなり顔を捻った。

「もしかして！浮気！」

深雪の顔がシリアスモードになる。

僕が殺されようとしても笑っているのに、何故こんな時だけ真面目になる。

僕は言ってやりたかったが言うのは面倒だ。

黙っておく。

「ま、白澤のことだし、それは無いか」

そして、また直ぐに、いつもの表情に戻す深雪。

表情が豊かで、いいな。

そうコロコロ表情を変えられるのはある意味才能だ。

僕は思った。

「で、なんで今日はリサがいるのかな？」

「僕も知らない」

そっけなく返答する。

「そっか、そっか。まあ、いいや。あつ、遅れたけどリサ、グッド
モーニング！」

深雪は橋場さんに体を向けて妙な挨拶をする。

「おはよう。深雪——」。ところで、白澤くん」

橋場さんは深雪にあいさつを返すと、静かに僕の方を向いた。

「深雪とは毎朝、こうしてイチヤついているんですか」

殺気！

なんだ！この殺気は！

「……………」

僕は無言。

その代わりと言わんばかりに。

「そうだよ！私と白澤の朝はラブラブなのだ！あつ、でも朝だけでは無いけどね。朝、昼、夕、晩。私たちはラブラブよ！」

深雪は余計なことを口にした。

「—————」

僕は静かに目線を橋場さんに向けた。

「ほう。そうなんですか白澤くん。」

橋場さんは例の刀を持っていた。

いつのまに持ってたのだらう。

さっきまでは鞘すら持ってなかったのに。

ああ、なんで刃を向けるんですか。

ああ！危ないです。

うっ、うわああ！

僕は今日も、そんな感じの慌ただしい朝を迎えることになった。

ああ、今日も死なないように頑張ろう。

そんなこんなで僕は朝から右に橋場さん、左に深雪をかかげて学校へと向かった。

登校のさいに深雪と橋場さんは幾度となく会話を繰り広げていた。そんな二人の美女の会話を小耳で聞きながらの登校であった。

学校の敷地に到着し、気が付くと辺りの視線を僕らは集めていた。それは学内の五本指に入る美女である深雪と橋場さんの所為であることは確定だった。

校内を歩くだけで人の目を奪ってしまふ。

それは美女と呼ばれる彼女らだからなせることであり、普通の女子にはできない話である。

かわいいと思わせる女子はたくさんいる。

しかし、足を止めて見入る女子はそうはいない。

だが、深雪や橋場さんはその思わず立ち止まって見入ってしまう女性性の部類であるのだ。

しかし、僕から言わせれば両方変人である。

何で美人と変人は隣り合わせ見たいな組み合わせになっているのであろうか。

納得がいかないものだ。

僕はそんなことを思いつつ校内を突き進み、校舎を駆け上がり、ようやく教室へと着いた。

教室のドアを開ける。

「おっ、朝奈！おはようさん」

開けると同時に教室内から滝が挨拶をしてきた。

「お………おう」

僕は微妙な感じで挨拶を返した。

思うのだが、滝はいつも俺が教室に入るたびにドアの前に立っている気がするのだ。

それは何故だろうか？

たぶん、あれだ。

ストーリー上の都合というやつだろう。

うん。

「あっ、滝っち！おっす！」

深雪が僕の左肩から顔を出して滝に挨拶をする。

「紀村さん、今日も元気ですね」

滝は世間話をするおばちゃんのような口調で深雪に言った。

僕は確かにと頷いた。

僕だったら、どんなアップ系の菓を飲んでも深雪のテーションの半分くらいだろう。

「朝からうるさいですよ。須原くん――」

すると僕の右横からすつと抜けて橋場さんが教室内へと入ってくる。そして、滝を見るなりに、そう言った。

「橋場さん？あれ？今日は朝早いですね。どうしましたか」

滝は橋場さんがいるのに驚いたように言った。

確かに、橋場さんはいつも学校が始まるギリギリに来ている。

だから、この予鈴がなる15分前に来ている橋場さんがめずらしいのだろう。

「ええ、今日は白澤くんたちと来ましたから」

橋場さんは前髪を手でさつと分けながら言った。

「えっ？白澤と」

滝はまたも意外そうな顔をした。

そして、今度はこちらを向いてきた。

「おい！白澤！どういうことだ！」

「どういうことはどういうことだ」

僕は問い返した。

「知るか！そんなことを俺に聞くな！自分で考えろ！」

滝はそう答える。

なら、僕が知るか――。

僕は思った。

「意味がわからん」

「俺もわけがわからん！何でお前何かが橋場さんに紀村さんという美女を両手に登校しやがる！女に興味はないみたいな顔をしているくせに！」

「何でか僕が知るか。いつのまにかに、橋場さんが家に来て、そのあとに深雪が来たんだ。理由は彼女たちに聞け」

僕は適当な口調でだるそうに言った。

「くそっ！橋場さん！」

すると滝は突然、橋場さんの両肩を手を取った。

「俺の何が朝奈に劣っているんですか！人望や優しさや良心なら余裕で勝っていると思いますけど！何ですか！」

そう言っただけ橋場さんの肩を揺らす。

ああ……。おい。止めろ。それ以上は……。。

僕の声にならない心の叫びがそう言った。

「うるさい……。邪魔です。白澤くんはタイプでは無い。しかし、須原くんは好き嫌い以前にどうでもいい。早くその手を話なさい。切りますよ……。。」

橋場さんは隣とした口調で坦々と述べた。

そして背に掛けてある、刀に手を伸ばす。

滝は素早く手を離れた。

ひびりまわった様子で滝は縮まり込んだ。

まあ、気持ちはわからんでもない。

怒った橋場さんは素で恐かった。

「リサってば、かけええ！」

深雪は楽しそうに、そう言っただけで笑った。

「そっ、そんなことないです！普通です！」深雪に誉められて顔を赤くする橋場さん。

一方で、

「くそっ！何で朝奈なんだ！」滝は嘆いて、そう口にする。

勝手に妬まれても困るわけだが……。。

「でも……。。」

すると笑っていた深雪が口を開いた。

「私は須原くんは好きだよ」

そう言葉を発した。

「そ、そうですか！さすがは紀村さん！」

急にはしゃぐ滝。げんきんなやつである……。まったく。

「そうか？」

「そうですか？」

首を捻る僕と橋場さん。

「うん、ほら楽しいじゃん」

深雪は笑顔を維持したままそう言った。

「さすがは！紀村さん！あなたは神だ！」

さらに、はしゃぐ滝。

「そうか？」

「そうですか？」

さらに、首を捻らせる僕と橋場さん。

「ほら、須原くんって役者的に三流でしょう！私たちの引き立て役みたいでいいじゃない？」

深雪は言った。

なおも顔は笑顔である。

「そうですよね！三流ですよ！引き立て役ですよ！———

って。んん？」

不思議そうに顔を捻る滝——。

「なるほどね」

「なるほど」

深々と頷く、僕と橋場さん。

「って！俺はそんな役じゃないいいいいいい！！」

滝は叫ぶ。

まるで三流のように。

まるで引き立て役のように。

滝——。

残念だがお前はそういうキャラなのだ。

仕方がない。

あっ！いいことを思いついた。

お前にもっとキャラを与えてやろう。

滝、お前は立派ないじられキャラだよ。

僕は滝の階級を三流キャラからいじられキャラに替えてあげた。

「あんまり変わってねえーじゃねえーか！」

滝は再び叫び声をあげるのであった。

昼休みの合図となる予鈴が学校内に響き渡った。

僕はその合図を聞いてずっと寝そべっていた机から体を起こした。

朝の授業はあつというまだった。

何故なら一時限目から、いままでずっと移動教室がなく、授業は教室。

だから朝から今まで、ずっと眠っていた。

学期が始まって最初の頃は先生達から幾度となく注意を受けた覚えがあるが、二週間が過ぎてからは注意を受けた覚えが無い。

はっかり言って僕は授業には出ているものの、出ていないも同然であつた。

まあ、学歴とかそんなことにはまったく気にしていないので問題はない。

なら、なんで高校生をやっているんだ？

みたいになるが、理由は簡単だ。

なんとなくだ。

僕は起きたばかりの目を擦って辺りを見渡した。

教室には人は既に少なかつた。

おそらく学食、購買ラッシュであろう。

教室にいるのは弁当組である。

まあ、僕はどちらにも属していない。

僕は無食派だ。昼に昼飯を食べない。

それは何故か？理由は、これもまたなんとなくである。

僕の生活の理由を問いたら九割はなんとなくであろう。これが適当の極み。

僕は適当な人間である。だが、だからこそ言わせてもらおう。
適当で何が悪い！

「別に悪くはないとおもわれ」

すると返答が返って来たことに驚いた。

どうやら声を知らぬ間に出していたようだ。

そして、返したのは目の前の席に当然のように座っている深雪であった。

「昼飯食べないのは、なな？ポリシーなわけ？」

深雪は問い掛けてきた。

「いや、別にポリシーではない」

僕は答える。

というか、そんな下らなく役に立たないポリシーを持ちたくない。
学校で昼飯を食べないのは、さっきも言ったように、あくまでなんとなくである。

深雪はへえーつとてきとうな相づちをうつ。

「というか、お前——。一体いつから、そこにいるんだ」

「そこって、どこ？」

「その席だよ」

「ん？そりゃ、授業が終わって少ししてからかな。白澤が起きたくらい」

なるほど——。どうやら、相当な時間の独り言を聞き取られていたらしい。

まあ、別に深雪だしいいのだが。やはり恥ずかしさはある。

うん！とわざとらしい咳払いをした。

「まあ、いいや」

「何がいいの？」

「だから別に気にするなって」

「うん？どういう意味？さっきの独り言もそうだし——。おかしな白澤。」

深雪は首を捻った。

だから、気にするなって――。

僕は嘆く。

「で、何かようか？」

僕は話を変えるように言う。

「用？用がなきゃ来ちゃダメ？」

深雪はわざとらしくカワイコぶって言った。

カワイコぶると言うが――まあ、普段から可愛いのだが。

「別にダメじゃないけど――」

僕はいつもの単調な口調で答える。

「ふーむ。あんか曖昧な反応ね。そこは、もっと。深雪ならいつでも来てくれてかまわないぜ！ベイビーみたいな反応をしたほうがいいと思うよ」

「ふーん」

僕はどうしてもよさそうに話を聞いて、どうしてもよさそうに相づちを打つ。

てか、今時に

「くだぜ！ベイビー」とか言う奴の気が知れない。

まあ、頭がおかしいことは確定であるが――……。

「むうー。つまらない反応だな――。まっ、ノリ良く応えられても白澤っぽくないから嫌だけど」

深雪は笑いながら言う。

地味に嫌味を言われている気がしてならないのは気のせいかな？

「用が無いなら保健室や屋上に帰れ」

僕はムスツとした口調で言う。

「何で？ここ一応、私のクラスだよ？」

笑いながら応える深雪。

一応かあ――。確かに一応だな。

僕は心のなかで頷いた。

「まあ、それに実際はちゃんと用があるのよ」

深雪はそう言うのとニヒヒっと笑う。

「明日の学園イベントのことなんだけど、なんでも参加は二人で一組だそうなのよ」

「二人一組？」

「そう。二人一組。英語で言うマンツーマンだっけ？」

「それは一對一だ」

僕は冷静なつつこみを入れた。

ああ、なるほど！っと深雪は反応する。

「なら二人一組は英語で何？」

「たまには辞書でも引いて自分で調べろ」

「うーん。私、辞書の使い方をまず知らないからなあ……。めんどいから別にいいや」

深雪はなおも笑って言った。

おい、馬鹿。笑って誤魔化すな。

「まあ、そんな訳だから明日は私と白澤のペアで出場ね。チーム名は『愛の塊』で決定」

「勝手に決定するな」

僕は言葉を挟んだ。

「何が楽しくてお前と組まなきゃならない」

「うわっ！ナチュラルにひどい！でも、まあ、いいじゃない。二人がいくらラブラブで無敵だからと言って否定する人はいないって」

「————」

ああ、もう、こうなったら誰がなんといおうが話を聞かない。

否定する人なら、ここに存在しているというのに……。……。

「はあ……。まあ、組んでもいいけど、チーム名をどうにかしろ」

何が『愛の塊』だ。

どちらかと言ったら『誤りの塊』だ。

愛というような言葉なんて一欠片もない。

「『愛の塊』はダメ？」

「ダメだ」

「なら『愛情の塊』は？」

「それもダメだ」

速答。

あんまり意味が変わっていない。別にゴロや呼び方が気に食わないわけじゃない。

そこらへんを理解してもらいたい。

「うーん。他に何かあるっけ？」

深雪は頭を抱えて悩んでいる。

実際、本当に頭を抱えて悩んでいる。

初めて見る。

あんな風に実際に人は考えるんだなと――。

「うーん、うーん！何も思いつかばない！」

深雪は悩むが、結局は暴れだす。

こんな問題ごときに真剣になるな。

もつと役に立つときに考えてほしいものだ。

「もう、いいや！白澤が考えて！」

深雪は投げやりに言う。

「俺が考えていいのか――？」

念のために確認。

「別にいいよ」

深雪は首を縦に振った。

「チーム名ね――……」

少々考えをめぐらせる。

「なら『MAX』――」

僕はぽつりと述べた。

「マックス？うん、また何で？」

「いや、ただ名前の頭文字を取って白澤のSと朝菜のA、紀村のKと深雪のM。それを並び替えてMAKSで崩し読みして『MAX』だ」

僕は説明をした。

対しての深雪の反応は――。

「うーん。――。なるほど。つまり暗号ね」

なんとも頭の悪い反応だった。別に暗号でもなんでもない。単なる思い付きであるのだが。

どうやら深雪には説明しても意味が取れなかったようだ。

「まあ『MAX』かあ。いい名前じゃない！ならチーム名は決定！明日が楽しみね」

深雪は笑顔でそう言う。

僕は適当な相づちで返した。

まあ、実際は気はまったくと言っていいほどに乗らなかった。

あえて言えば逆。

何か妙なことが起こりそうで恐かった。

第四章

今日は十日。

つまり、学園イベントの当日である。

はつきり言ってる気は出ない。まったく言っていない程に。

それは、そうだ。もともとやる気の欠片も無かったのに、今更になってやる気が出るわけではない。

部活生が大会直前になると突然やる気を持ち出すような現象は起こりはないのだ。

僕は朝、起きてからの第一声は

「ああ、だるい」だった。

本当に怠い。できれば、こんなくそのようなイベントは出たくない。参加自由であるのに何故、僕は出なければならぬのだろうか。

反論の意見でいっぱいだった。

しかし――。

まあ、今更になってしまえば仕方ない。

深雪と橋場さんにも出るように言ってしまったので、今更出場しないなどとは言えないのである。仕方なくは無いが。どうしようもない。

はあ――。

無言で溜息をついた。

今日の学校はグラウンドに集合であった。

朝から登校した人から順にグラウンドに並んでいく。

僕もまた、同様に列に並んだ。

「あっ、やつほー！白澤！」

すると偶然にも前に並んでいたのは深雪であった。

果たして、これは偶然か――？

あまりに不自然だったので、疑うしかなかった。

が、僕はとりあえず

「おう」と相づちをうった。

「ふふふっ、楽しみだね!」

深雪は楽しそうに笑う。

もう、既に楽しそうである。本当に楽しそうであった。

いったい何が楽しいのか――僕にはわからない。

まあ、わかりたくもないが。

「目指せ優勝だね!」

「やっぱり優勝とかあるのか?」

「そりゃ、そうでしょう。優勝者には学内トップ特権って書いてあったしね」

「そんなに欲しいのか――?」

ちなみに僕はそんな怪しげな特権欲しくない。

あげると言われてもいらぬ。別に校内での地位が欲しいわけでも何でもないからだ。

参加理由は友達が無理矢理である。故に望みなどない。

まあ、望みがあるといえばある。この場で棄権すると言う望みだ。だが、叶わぬ願いである。

「欲しいのかって――えらく客観的ね。白澤は欲しくないの?」

深雪は首を傾げる。

「別に」

僕はそう答える。

「そう? 私は勝負事は一番じゃないと気が進まないのよ! だから、出るからには一番!」

深雪はそう言って、腕を高く突き上げる行動を見せる。

えらく、張り切っているようだ。

できるなら、常日頃の学校生活ときにも、そのやる気を回してほしいものであるが――。――。

僕がそう思っていると。

「いいえ! させませんよ!」

背後から声がした。僕はなんで丁度いいタイミングなんだろうと不思議に思った。この時点で誰なのか予想はついた。

僕と深雪は声に反応して同時に後ろを振り向いた。後ろにいたのは、やはり橋場さん——…それと、その橋場さんの後ろに以外にも滝の姿があった。

「やあ、橋場さん」

僕は挨拶を交わした。

「やつほー！リサ！」

深雪も同様に——。

「ええ、お早ようございます」

橋場さんは深々と頭を下げて丁寧にお辞儀をした。

「って俺には挨拶は無いのかよ！」

もはや、お約束のように滝は一人で文句を言う。

「あつ、いたの？須原くん——」

深雪は知らなかった———そう言わんばかりの顔をした。どうやら滝を視覚として捕らえることができないようだ。

それは何故であろう。答えは簡単である。生理的に受け付けないのだろう。

僕は嘆く滝を見て哀れんだ。

「まあ、須原くんは置いといて——。さっきの言葉はどういう意味？リサ——」

深雪は問う。

ちなみに置いておかれた滝は、さらに嘆き度を増していた。

まあ、可哀相ではあるが、滝だしどうでもいい。

僕は深雪と橋場さんに視線を移した。

「言ったとおりに、優勝は私のものですから」

橋場さんは当たり前前なことを喋るかのよう言った。

「へえ——。リサも出るんだ？誰とでるの？」

深雪は緊張感にかける声で聞いた。

そう——。それは僕も少々気になっていたところだ——。

まさか——……。

「私のパートナーは須原くんです」

どうやら、そのまさかだった。

「はあ——？ 滝？」

僕は首を傾けた。

「おい！ 朝奈！ 何故首を傾ける！」

滝はすかさずに指摘をしてくる。まったく——うざったいやつめ。

「でも本当に何で須原くんなの？」と深雪は橋場さんに問い掛ける。すると橋場さんは

「ふふっ」と笑った。

「何でってハンデですよ。須原くんは確かにヘボで間抜けでお調子者でドジで役にたたずにお荷物かもしれませんけど、まあ——私がいいますから」

橋場さんはそう言うのとふっと髪をなびかせた。

つまり、彼女は一人で十分だと言いたいようだ。

なんという大胆不適——なんという自信家だろうか——。

「っておい！ なんだ！ その荷物発言は！」

滝は何かを主張しているようだ。しかし、その声は誰の耳にも入っていない様子である。

「まあ、リサなら一人で大丈夫よね」と滝を無視して深雪が言う。

滝は再び嘆いている様子である。だが誰も気にしない。

それにしても。まあ、確かに橋場さんならチームを組む必要性は無いはずだ。一人で何でもこなしてしまいそうである。いくら滝が役に立たなくても。

「だから深雪！ あなた達には負けませんよ！」

橋場さんは宣戦布告してくる。

これに深雪が乗らないはずがない。

「こっちだって！」

二人は向かい合ってそう言い交わした。

すると橋場さんは今度は僕の方を向いて——……。

「約束、守ってもらいますよ!」
そう言ってくる。

約束とは勝ったほうが深雪にふさわしいだ、どうのこうのというやつだ。もちろん理解はしている。

僕は

「はい」とだけ告げ返した。

すると橋場さんはニヤリと笑う。

うーん——……なんか大変なことになりそうである。そんな感じがした。

「って、おい!なんで俺を抜かして盛り上がっているんだよ!」

俺は一人で抗議の声を叫んでいた。

僕が知るか——……少し黙っている。

僕は俺にそう言ってやりたかった。

そして、ついに学園イベント前の全校集会集会が始まった。

まだ眠そうな顔した生徒達は、全員グラウンドに集められている。

しかし、その大抵の人たちがやる気のないような、めんどくさがるような顔をしていた。それは、そいつらのおおよそは、おそらくイベント参加をしてないイベント不参加のメンバーであるからだ。

この学園イベントは名前に学園とついておきながらも参加は自由とあった、なぞのイベント。

本当になぞ。だから、参加する人も少ない。出ている奴らは大抵、興味本位であろう。

だから出てない奴らのほうが圧倒的に多い。まったく気が入ってないような、他人事のような、やる気の無いような顔をしゃがって——……!

できれば交替してほしい限りである。僕もゆっくりとしておきたいものだ。

僕はそう思って隣で悠長と欠伸している先輩の顔を睨んだ。まあ、

睨んだところでどうにかなるわけではないが——……。

すると、グラウンドの礼台に一人のスーツ姿の男性があがっていく。生徒一同の視線が注がれる。

「えーっ——……」

マイクで一回発声練習をして、少しだけ間が差した。そして、おっほん！と咳払いをして——。

「皆のしゅう！おはよう！」

男は低く特徴ある声で挨拶をした。僕はそれが誰であるかわかった。校長であった——……。

これで校長の演説を聞くのは二回目になる。

約一ヵ月ぶりであった。

やはりあれが校長のようだ。一ヵ月前、つまり入学式でとんでも発言をした人物はびっくりでもなんでもなく本当に校長だったようだ。それにしてもだ——……。一発目の出だしの言葉が皆のしゅうである。いったい、どこの核開発宣言であろうか？

普通の高校の校長なら、せめて生徒諸君くらいでなかろうか？

さらに校長は続ける。

「今日はいよいよ、この日がやってきた——……。何を隠そう！そう……一ヵ月に一回の学園イベントの日である。学園！それはパラダイスである！イベント！それは祭りである。つまりパラダイス祭り！自由で平等は学生には無いかもしれない！子供たちには無いかもしれない！だから、こそ自由や平等を求めろ！反抗する。この学園イベントはそのイライラやストレスを十分に発散するように設けたイベントである。」

—————。

生徒一同は静かである。

グラウンドは人の割合には異様に静か。

僕もまた無言。

てか、この学園イベントはそんな意味があったのか——……。初めて知ったよ。単なる校長の思い付きではなかったのか。

あの校長も少しは、何か考えていたのか。
確かに校長の言い分もよくわからなくない。

子供より大人の方がきついやだるいやいそがしいと言うが、実際は子供も大変なのである。

別に子供のほうが大人よりいそがしい、とかいいやしないが、子供もまた大変なのだ。

だから大人にストレスが溜まるように子供にだってストレスが溜まる。しかし、大人には酒や金など発散方法は山ほどある。しかし、僕ら――…子供には、それができないが故に自殺だのの事件が多発する。

子供にもストレスを発散できる何かが欲しい。

その点を校長は理解してくれているよである。

僕は校長を少々関心してみた。

校長は更に続ける。

「故に！今回の学園イベント第一回はサバイバル。さあ戦え！サバイバルバトル！である！今からルールを説明しよう」

校長はそう言うイベントのルール説明を話はじめた。

「実際はルールと言うルールは特にこれといってあるわけではない。サバイバル。その名の通りにルール無用の戦いである。武器使用可！急所攻撃可！しかし、一応殺しは失格である」

校長は言った。

何を言っているのか？

僕は耳を疑った。

えっ！？武器！？えっ！？急所！？

そんな感じである。

一応、殺しはダメって、そこは、一応とか無しに殺しは失格でいいじゃないか！一応ってなんだ？

一応って――特例で殺しも許可とかになるのであろうか？

そんなただの学校行事で法律を無視してもいいわけがない！てか、生徒同士を戦わせるのは果たして有りなのか？それも法律上で余裕

でアウトでは無いのか？

僕は頭を抱え込む。

「勝ち負けの判定は簡単だ。参加者には休校舎に入ってもらって戦ってもらおう。一応タイムリミットを設けて11時スタートで3時終了の四時間タイマー。残っていたチームの勝ちで2チーム以上残っていたら、そのチームには優勝である。つまり、一位が3チームで可能性もあれば1チームもでない場合もある。休校舎から出れば棄権とみなす。休校舎には至る所に監視カメラが設置しており、残り1チームになった時点で終了を確認する。優勝チームには、もちろん豪華商品がある。がんばってくれたまえ」

校長は、ルールを説明し終えたようである。

――――。

ルール説明が終わった後も、辺りは一瞬まだ静かであったが――――。

がやがや、ざわざわ。

辺りは一瞬で姿を変え騒ぎだした。

当たり前だ――――。

あんな、とんでもないようなルールを聞かされたら動揺する。遠くからで判らないが、校長の顔が微笑んでいるような気がした。まったくあの校長は生徒を使って楽しんでいるようだ。まったく最低な校長である。

こんなイベントをしなくても、あの顔を殴れば僕のストレスは大抵納まりそうだ。殴らせてくれないだろうか？

校長は息を大きく吸い込み。

「では、第一回学園イベントさあ戦え！サバイバルバトル！を開催する！」

校長は校内中に十分届くような声で開会を宣言したのだった。

この時の校長の真相は一体なんなのか？果たして、本当に思い付きだけだろうか？

僕は頭を悩ませたのだった。

「何が開催するだ——……」

僕は演説が終わるなり、直ぐに文句を口にした。

その頃には既に校長は礼台の上から身を下ろしていた。

誰もいない礼台に向かって文句が飛ぶ。

「あら白澤？何で、そんなに怒っているの？」

深雪はこちらを向いて平然とした様子の顔で聞いてくる。

「何でって。あんなめちゃくちゃな事言っているやつ言うことを聞けるか！あれは校長として終わっているんじゃないって、人間としてどうかしている」

「あらあら、ミー君可哀相に」

「ミー君呼ぶな！」

僕は反発する。どうやら少々気が立っているようだ。僕らしくもない。

そんな僕を裏腹に

「えーっ、ミー君はミー君だよ」と、いつもの間が抜けたような口調で深雪が喋る。

「あー！このさい校長の呼び名なんてどうでもいい！勝手に呼べばいい。けど、僕はこんなふざけたイベントなんか出ないからな」

僕は願望を述べる。

出たくない。出る気がまったくなくなった。

理由はあの校長の考えるようなイベントから出来るだけ避けたいのだ。

「白澤！何言っているの！これに乗れれば全国制覇は目の前なのに！」

深雪は僕を説得しはじめた。

何を言っているのって——そっちの方が何を言っているのか解らない。

全国制覇？なんだ？それは——。

「とにかく！一回出るって決めたなら優勝しないと男が廃るわよ」
「僕は別に男としてのプライドとか気にしてない。それに、これを棄権したからって男のプライドが無くなるわけじゃない。それに、ほら——」

僕は受け付けの所に集まる人込みに指を向けた。

深雪もそちらに目を向けたのを確認して。

「さっきの演説を聞いて参加を取り消そうとしているやつらだ」
「——」

深雪はめずらしく無言。

どうやら考え直す気になったようだ。

さあ、なら僕らも参加を取り消して棄権しようじゃないか！

僕はそう言おうとしたが——…………。

「それは好都合じゃない！」

何故か隣で歓喜の声をあげる深雪。

僕は

「はあ？」と首を傾けた。

「ライバルが減ってラッキーじゃない！これで全国制覇の夢も近いわ」

深雪はうれしそうに、そう言った。

大丈夫か？この娘は？

前からおかしいとは思っていたが予想以上だ。深雪の異常レベルは僕の脳レベルではどうやら計りきれないくらいであるようだ。

それにしても僕らの目標がいつから全国制覇になったのだろうか。それ以前に深雪と二人で何か目標を立てたことがない。

彼女の妄想は現実とリンクしているようだ。
大変である。

「本気で出るつもりか——武器あり、急所攻撃、何でもありのルールの馬鹿げたゲームだぞ？」

僕は再度問う。

「当たり前でしょう！優勝旗は既に私のものだからね」

！」

深雪は大声で問題発言をする。

いくら、何でも最後の宇宙人は言いすぎである。

それに僕は戦う以前に戦わない道を主張しているのだが。

「ああ！もう！つべこべ言わない！黙りなさい！さっさとエントリーしにいくわよ」

深雪はそう言うのと僕の腕の裾を引っ張ってエントリーしにいく。

もう、こうなったら腹をくくるしかない。

深雪を誰も止められはしない。

もう、好きにしてくれ。

僕は疲れたよ。

はあ———。

ため息をついた。

僕と深雪はエントリーを済ませて———ただ今、舞台である休校舎の前に来ている。

僕は入学してから学内を、そう動き回ったことが無いので、初めて休校舎と言うものを目にしている。深雪もまた初めて休校舎に行くらしい。

そして初めて見る、休校舎のイメージだが、休校舎は予想以上に古く———予想以上に大きい。

大きさでは今僕らのクラスがある東校舎と、そう変わらないのではないだろうかと思わせる。

そして何より雰囲気がソレっぽい。ソレっぽいって、どれっぽいかと言うと………何かわからないが異様な不気味さがある。そんな感じ。

何か出てくるんじゃないかと思わせる。

そんな風に僕が休校舎を眺めていると———。

「白澤さん——。まさか恐いんですか？」と背後から橋場さんの声

がした。

僕と隣にいる深雪はほぼ同時に後ろを振り替える。

そこには、もちろん橋場さんと滝の姿があった。

「よく逃げずに参加したようですね。噂によると前日エントリーが100チームあったんですけど、たった今7チームに減ったらしいですよ」

「それは、それは——その方たちは頭がいい人たちですね」と僕。

「白澤くんが言っているのは参加した方々のことですか？それとも棄権なされた方ですか？」

橋場さんは眉をひそめて聞いてきた。

そんなのもちろん。棄権した方々ですよ。

こんな馬鹿みたいなイベントに出る人なんて正気じゃないですよ。僕はそう思ったが、口には出さずに、ただ笑って誤魔化した。

「何も言わない、美德。ポーカーフェイスはあなたの特権ですか？」

まあ、いいです。笑っているのは今のうちですからね」

橋場さんはニヤリと、僕を見て笑った。

おお、恐っ——。

なんだ？あの笑みは————。

「リサやる気満々だね」

深雪は橋場さんに気軽に声をかける。まったくの緊張感が無い喋り方。

果たしてやる気はあるのだろうか？優勝とかいいながら全部僕に任せてしまうって落ちじゃないのか？これは————。

僕のはほーんとしている深雪の顔を見て思った。

「当たり前です。深雪、どちらが勝っても恨みっ合いはなしですよ」「上等！」

がってんだ！つと深雪は続ける。

僕はがってんだ！とは何かふと考えた。よく中年のおじさんが使うが意味がいまだに理解不能。

がってん——ガッテン——合点。点が合う。

なるほど。そう意味はなく僕はうなずいてみた。

まったくどうでもいいような気がした。まあ、それはいいとして今度は滝に目を向けた。

滝は今にも死にそうな目をしている。

「滝？大丈夫か？」

声を掛けてみた。

「あははっ、朝奈。あははっ、朝奈の声が聞こえる。花畑から朝奈の——」

僕は3歩程度、身を引いた。

「————」

滝は焦点が合っていない目でこちらを見てくる。

恐い。滝の身に何があったんだ！

僕がそう思っていると、それを察知してか橋場さんが説明する。

「須原くんがどうしたら役に立つか考えて、普通にするよりも薬でどうにかしていたほうが役に立つかなって思って、適当に薬を飲ませたらこれですよ」

橋場さんは肩をすくめたポーズをとって、やっちやったみたいな顔をした。

「ってこれですよ、じゃないですよ！滝が死にそうじゃないですか」
薬の使い方も知らずに合法しやがって——。下手したら死ぬぞ！

「まあ、須原くんですしね許容範囲です」

いやいや、いくら滝でもそれは許容範囲ではない。

「あははっ！須原くんおもしろい！」

深雪は滝を見てはしゃいでいる。

「あはははっ、あはははっ！今度は紀村さんの声が——」。楽しいな」

滝はあやしげな笑みと笑い声をあげていた。

「……………」

僕はだまって、その様子を見ていた。

まったく笑い事ではないのだが——。

すると――。そんな僕ら四人に二人の生徒が寄ってきた。

「君たちも参加するのかい？」

僕らの顔をみて二人組の生徒の片方が話し掛けてきた。

僕は二人を見返すように見た。

両方とも男であった。内心つまらない。

なーんだって感じである。女であつたら気が多少だがやる気が上がるっていうのに。

「なんですか？」

見るところ先輩のようだったので丁寧語を使って返事をする。

「いや、俺らもイベント参加なんだよ」

気が軽そうな喋り方。

おまけに無駄に伸ばした髪の毛。

こういう先輩は嫌いである。なんか一緒にいてむかつく。

俺らもイベント参加だ？

あっそう。って感じである。だから、どうした用がそれだけなら、どっかにいけ。

僕は今、あまり気が安定してないんだ。

「そうですか」と、どうでも良さそうに僕。

すると男等はこちらを見て微笑む。気持ち悪い笑みであつた。

「君ら本当に大丈夫？このイベントのルール読んだ？サバイバルだよ。ルール無用の。危ないよ。棄権したほうが身のためだよ。ははははっ」

男は笑う。

「――――」

僕は無言。

ああ、うざっ！やべえ！こんな漫画のやられキャラのようなやつが実在するとは！

「そこの危ない目をした男のきみとか今にも死にそうだよ？」

もう一人の男、さっきのを男Aとすると男Bが滝を指差している。
ああ、確かにね。死にそうだね。だから、どうした。――――ん？
ここは、よくも滝を馬鹿にして！と怒るべきなのか？――――まあ、
いいや。

僕はなおも黙った。

すると以外にも答えたのは橋場さん。

「黙りなさい。うるさいですよ、あなた達」

いつもの口調。どうやら先輩であろうが彼女にとっては意味は無いらしい。

「おっ、気の強いお嬢ちゃんだね。きみ？なんで私服なの？危ないから棄権したほうがいいよ」

男Aは言う。

「聞こえませんでしたか？黙りなさい。切りたいのですか？」

橋場さんは男二人、しかも先輩を睨みつける。

度胸がある。男の僕からして見てもかっこいい。

「くっ、後輩のくせに生意気だな！」

男Bは腕を振りあげようとする。

ああ、どこまで古典的なやつなんだ！どの時代の漫画の雑魚だ！

僕は逆に興奮する。馬鹿に磨きがかかればもはや天才である。

男の手が振られる。

がつん！

しかし、橋場さんにはあたらない。あたる前に背中の鞘でこぶしを止めた。

「文句ならイベントで聞きましょう」と橋場さん。

かけい！やばい、惚れそうだ。まあ、惚れないけど。

と僕の感想。

「くっ！わかったよ！イベントでやつけてやるから覚悟しときな！
譲ちゃん」

男二人はそうはき捨てるときっそうに、消えていった。

なんだったのだろうか？さっきの雑魚Sは？ある意味で神掛かって

いたが。

すると――。

『それでは時間になりました。参加者は休校舎の中に入ってゲームを開始してください』と校内アナウンスが流れる。

「ふうー。じゃあ、橋場さん、またあとで滝をよろしく」と僕。

「じゃあね！リサ」と深雪。

それを聞いて頷いて橋場さんは

「では、いい勝負を」と滝を引きずって先に中に入っていく。

滝は相変わらず

「体が勝手に――――！あはははっ！」だの不気味な笑いをしていた。

僕と深雪はそれを無言で見送った。

第五章

「ふーっ……。で、これからどうするの?」

それが僕の休校舎に入ってから第一声である。

つまり、大会開始直後の言葉である。

それに対して深雪は僕の目の前に立って歩いている。僕は遅れないように後ろから付いて歩く。

「どうするって?」

緊張感のまるでない声。

「いや、どうするって——」。何か策とかやる事とか考えてないのか?」

「策?やる事?」

すると足を止めて、こちらを振り向く深雪。

僕も遅れて足を止める。

「ああ、策だよ。どうやって今から行動するとか、武器は?何かあるのか?」

僕はとりあえず、ふと気になっていたことを聞いてみる。深雪のこどだ。策は無いかもしれないが、いくらなんでも武器の準備くらいはしているだろう。

そう思って聞いたのだが——。

「そんなの無い」

と簡単に答えられてしまった。まあ、だろうと思ったよ。

「って。おい!そんなんで、優勝する気無いか」

「ん、それは、ある!もうばりばり」

ばりばりあるらしい。あるならあるでやる気を見せてもらいたい。

「なら、どうやったら優勝できると思う?」二つ目の質問。

「向かってくる奴を滅多打ち!」回答にならない解答。

「————」

まあ、こんな事だろうとは思ったが——。あまりに無謀すぎる。

「なあ、深雪。このイベントはただの遊びと勘違いしてないか？おそらく、さっき校長が言ったことは冗談じゃない。殺しも本当に有りなのかもしれないだ」

そう、殺しは反則にならない。これは大抵の奴は冗談としているが、恐らく冗談ではない。

この学校は根本的に可笑しいのだ。

恐らく今参加している奴らは、それを承知で参加している奴らばかりであろう。

血に飢える高校生。

以外にそう少くはないはず。いや、むしろ若いからこそ血に飢えているんじゃないだろうか？だから最近若者の親を暗殺した事件やら友達を殺す事件、自殺と濃い事件が沢山存在している。

それを理由に、このイベント参加している奴らも多いはず、いや……むしろ、あの校長少なくとも、これが目的であっただけではないだろうか？そう思わせられる。

生徒を殺させ合う先生。

馬鹿で最低である。

そして、それを知り得て、それに従う生徒達。それも……………。

馬鹿で最低である。

「ふふっ、恐いの白沢——？」

笑みを作って、こちらを向いて首を傾げる深雪。

「————」。怖い、恐くないの問題じゃない。お前も、もう分かっているだろ？このイベント、校長の目論みくらい」

「うん、そりゃあね。ミー君はきつと退屈なんだよ。楽しいことをしようとした結果——このサバイバルイベント。かなり面白いよね」

深雪は笑う。

このイベントが殺しを含んだ意味を持っていると解りつつも笑って言う。おもしろいって…………その面白みが理解しがたい。理解できればできたで嬉しくも何ともないが。

「笑えないよ。こんな馬鹿みたいなアホのようなイベントで死人が出たらどうするんだ？」と僕は反論。

「でも、主催者はそれを願っているんだ。ミー君はきっと、つまりらない退屈な学校を楽しくしようと――」

深雪の言葉の途中だが割って入る。

「そんな私念で生徒を殺そうとするな！」

「いいんや！白沢、結局は私たち参加者の責任だよ。死者が出たら私たちの意志。このイベントは結局みんな倒しさえすればいい。別に殺せというルールはない。それでも、なお死者が出るなら参加している私たちの理念に過ぎない。退屈な学校生活や社会にうんざりしている私たちの私念だよ」

「――」

僕はしばらく無言であった。

そして、一分くらいの間を空けて口を開いた。

「それでも馬鹿でくだらないのは変わり無いだろ」

「いいんや。勝ちさえすれば強く、かっこいいんだよ！」

首を振って深雪は答える。僕は対して眉を寄せてしかめ面になった。

「深雪は生徒を殺す気か？」

「ふふっ――」。生徒を殺すのは恐いの白沢？でもきみは赤の他人なら沢山殺してきたじゃないか？」

深雪は笑顔で聞いてくる――。

「――」

僕は無言。

「――」

「――」

僕は深雪の顔を見つめ、深雪は僕の顔を見つめる。

そして、先に視線を外したのは深雪であった。

「なーんってね！」

ひょうしが抜けるような間の抜けた声。

「別に殺しはしないよ。そういう趣味じゃないもの。私の目的はあ

くまで優勝よ！殺しに興味なんかないわよ」

「————。まっ、そんな所か。お前の言いたいことはおおよそわかった。でも、また何で優勝なんだ？別に優勝にこだわらなくても」僕は問う。

「ふふっ、だって一番は強くて格好いいのよ！」

深雪はいつもの笑みを見せる。

「まったく————どうにかしている。命懸けで格好よさを選ぶのか？」

「当然！」当然と言わないばかりのしつかりとした返事。

やれやれだ。ああ、実にくだらない。

くだらないが————。今更だが何故かやる気が湧いてきた。

それは何故か？

深雪の目的が殺しではないと分かったからか？いや、そうではない。単に優勝したいからか？いや、そうでもない。

恐らく————。

僕のやる気の原因は————。

そっか。そうだな。

そういうことか。

僕は自然と頬笑みを作っていた。

「あっ、白沢もやる気になった？」

「ああ————ちょっとだけな」

「ふーん。なら丁度いいわね。全方から足音が二つ。とりあえず、そいつらから、やつけましょうか！」

「————。ああ」

僕は笑った。

殺しを目的に参加した奴ら。そんなに死に急ぎたいなら————一度、死以上の恐怖を————。

思い知らせてやるよ。

僕はナイフを構えて休校舎の廊下を一気に駆け出した。――。

その時の僕の顔は笑っていた。

あはっ――。

あはははっ。

楽しいな。お花が沢山、蝶々がいっぱい、クマさん、うさぎさんも皆集まって、楽しいな――。

あはっ――。

あはははははっ。

「って！冷たっ！」

「あら？須原くん？正気に成りましたか？」

「ん？あれ？」

俺は辺りを見回した。

寒さに気が付いて目を開いたら目の前に橋場さんが立っていた。しかし、何やらバケツのようなものを持っている。――て、アレ？なんで俺は濡れているんだ？

「えっと――？ここはどこ？」とりあえず尋ねてみることにした。

「――。まだ正気でないのか既に正気なのか曖昧なことを言いますね」

「一応、正気なんですが……俺は何で橋場さんと？」

「学園イベント……と言えば思い出しますか？」

――。ああね！思い出した！

俺はポンと手を叩いた。

「でも？あれ？俺は朝、学校に登校して……あれ？その後は――あれ？」

首をぐるり、ぐるりと左へ右へと捻り回す。

しかし、何かを思い出すわけではない。無意味な動作である。

「えっと、橋場さん」

「何です？」

「朝から今まで記憶が無いんですけど。どうかしたんですか俺は？
記憶からスッポリと抜けた記憶。」

これは……。まさか！

「そうか！俺には知られざる、もう一人の俺の意識があったのか！？」

「……………」

あれ？違うのか？何か橋場さんは可哀相な目でこっちを見ているぞ。
あれ？何かしたのか俺は？

「あの橋場さん……。もう一人の俺は何かしちやったんですか」

「知らないほうが身の為ですよ。忘れなさい」

「そっ……。そうですか？でも、そう言われると知りたくなるのが人の性ですよ！」

「いいから……。黙りなさい！」

橋場さんは片手を刀に掛けて、こちらを睨む。

俺は

「はい——」としかいいようが無かった。

「まあ、とりあえず——ここはどこですか？」

俺は気を取り直して話を再開した。

「てかつ、もうイベント開催中なんですか？」

それに対して橋場さんはため息を短く一回ついた。

「結局は逆効果になってしまいましたね。まあ、役に立たないのは、あまり変わり無いですが」

ん？俺のことを言われているのだろうか？

「ふーっ……。とりあえず今いる場所は休校舎二階の女子トイレです」

「そうですか……。休校舎二階の女子……。えっ！じょし！！」

「何を慌てているんですか？平気で女子トイレ覗いてそんな顔しているのに」

平然とした顔で橋場さんは言う。

「そんなこと無いですよ！一度も覗いたことも、入ったことも――
――まあ、匂いは嗅いだことはありますが！」

「匂って――。まあ、須原くんですから。予想はしていましたが。
変態なんですね」

「須原くんですからの意味が解りませんよ！てか、橋場さんは俺を
女子トイレを平気で覗く人に見てたんですか！？」

「当然です」

「自身満々に言わないでくださいよ！訂正してください！俺のキャ
ラ付けを！俺を……………」

「いい加減にうるさいですよ。斬りたいんですか？」

再び橋場さんの手が刀に触れられる。

「いっ…………いえ！滅相もないです！」

「ふーん。なら、いいですけど。とにかくです。もうゲームは始ま
っているんです。しっかりして下さいよ」

「あっ、はい。すいませんでした」頭を下げてあやまる。

「なら、これからの話ですが。須原くんには重要な役割をしてもら
おうと思うんですが」

「えっ……………」

思わず声を上げた。

どうせ、役に立たないから後ろに立っているとかうんじやないの
かと思っていたのだが。

聞き間違いではないなら、重要な役割。重要な！重要な！役割だ！
まさか、橋場さんは何だかんだ言いながら俺を認めてくれているの
か？

おい！朝奈！聞いたか！

いや！聞こえないだろうけど、聞け！

俺は！俺はあああ！

「はい。完了と」
どすん！

いきなりだった。

いきなり、目の前にドアが閉まった。

あれ？何だ？このドア、開かないぞ。

トイレだから内ロックのはずなのに、何で開かないんだ。

「それじゃあ、その中でじっとしてて下さいね」

と橋場さんの声が外側から聞こえてくる。

「えっと……。これはどういうことですか？」

「見てのとおりです」

「ドアの把手しか見えないんですけど」

「なら思ったとおりですよ」

「女子トイレって以外と予想より興奮しないんですね」

「……………」

どうやら冗談で言った、つもりが相当退かれたようだ。

「えっと……。つまり、どういうことですか？俺の頭に解るように

お願いします」

「答えは簡単ですよ」

橋場さんは明るい声色で言った。

「須原くんは邪魔です。トイレの中でずっと待っててください」

「一言ではないじゃないですか」

どすっ！

するとドアに刀が貫通してくる。

俺のこめかみに刀が当たった。

「うるさいですよ。とにかく中でじっとしてて下さい、この役た

ず」

「……………はい」

僕は頷くしかなかった。

ドアの前には何か置かれて開かない。

しかも、上からよじ登ろうとしてみたが自棄に壁が高い。

なんで休校舎のくせに、こんなセキュリティがしっかりしたトイレなんだ？

まあ、いいや。トイレの床のタイルの枚数でも数えるかな。

「では、行ってきます」

「はい。がんばって」

そうして俺のタイル数えは始まったのだった。

「ふう————」

僕は一息して溜息をついた。

「とりあえず一段落終了ってところか」

目の前に横たわる二人の学生の姿。

これは、先程対峙したイベント参加者。つまり、敵である。

名前も知らない誰かだが危機して、こちらを襲ってきたので返り打ちにした。強さはいいまでもない。

「以外とあっけなかったわね」と深雪。

退屈そうに背伸びを傍らでしている。

「……………。退屈なら深雪、おまえが戦えば良かったじゃないか」

「うん？私は非戦闘要員よ。それに白沢がいるのに私が戦う理由は無いでしょ？だって白沢は無敵鉄人なんだから」

「僕は無敵でも鉄人でも無いんだがな」

そっけない口調で僕は言う。

「そう？まあ、勝ったんだしいいじゃない？あっ、こいつのポケットに拳銃入ってるわ。うわああ、もう銃刀法違反もくそじゃないわね」

倒れている生徒のポケットから拳銃を一丁抜き取って深雪は言う。

「————」。まあ、確かにな」僕は頷いてみせる。

確かに、これではここは自衛隊の訓練区域かなんかなのかと疑ってしまう。

はあ。っと再び溜息をついた。

すると……………。

ばんっ！

「……………!」

右頬を弾が掠めて壁へと突き当たった。

「えへへっ、間違って撃っちゃった」

深雪を見るとニカッと笑いながら舌を見せる。

「まさか引いたら弾がでるなんてね。この銃すごいね。オートで引かれるようになってるよ」

「————」

いや、そんなのはいいとして勝手に引き金を引かないで欲しい。

「……………。敵より味方の方が百倍怖いよ」僕は呟くように言った。

「うん？ そうかな？」

「そうだよ」

「まあ、とにかく後は残り5チームだね。リサ達を抜かしたら4チーム。さっさと排除して行こうか!」

やる気だけは一人前の深雪。

「この倒した奴らはどうするんだ」

「ん？ こいつら？ 別にこのままでもいいんじゃないのかな？」

「そうか？」

「そうそう、次いこう! 次!」

深雪は奪った銃を振り回していると————。

ばんっ!

再び銃声。

しかも、またもや僕の頬を掠める。今度は左であった。

「————」。おい、深雪」

僕は苛立ちを胸に深雪を見た。しかし。

「いや、今のは私じゃないよ。英語で言うと、えーっと……………」

アイ・ドント・キル!？」

私は殺してない。……………いや、殺すな!

まあ、そんな深雪の馬鹿げた英語はどうでもいい。

問題は発砲したのは深雪ではない。

つまり……………。

「走るぞ！深雪！」

僕はそう大声を出して深雪の手をとり走りだした。

それと同時にズダダダダッと銃声の嵐が起こる。

つまり再び敵の登場である。しかも、今度は拳銃では無くてマシンガン。

いったい、何処で手に入れるのだろうか？そんな物騒なものを。

いや、今はそれどころではない。

敵はこちらを狙って撃っている。しかし、僕らは敵の存在は判るものの、場所や戦力が判らない。

つまり比較的に不利。

とにかく今は逃げの一手である。今はマシンガンの弾を避けている自分が自分で信じられない。

「ああ、たまや————」

深雪は僕に手を引っ張られながら呑気なことを口に出している。これは花火かなんかなのか？まあ、火薬弾っていう点は似ているが………。根本的に色々と間違っている気がする。

「ああ、うるさい！」と僕は深雪に激怒して、尚も走る。

そして廊下から近くの教室に隠れ込む。

相手はそれを確認したのか銃を撃つのが止み、銃声が止んだ。

「わあ！ピンチ！これが主人公ピンチって場面かな！」

何故か、この場で騒ぐ深雪。何がいったい楽しいのだろうか。理解できない。

「まあ、確かにピンチだな。これは」

僕は感情なく呟いたのだった。

「出てきなさい」

橋場リサは廊下に出て、そう鬼気した口調で言い放った。

凜とした声は人がいない休校舎の二階に響いた。

その声が響いた数分後に前方、後方、つまり橋場リサを囲むように男が二人出てきた。

「やっぱり貴方たちでしたか」

橋場リサは男二人を確認して呟いた。

「へへっ、相変わらず気が強そうだね。でも嬢ちゃん、男は気が強い女を這いつくばらせたいものなんだぜ。へへへっ」

不気味に笑う前方に立つ男A。

「気持ち悪いですね。変態ですか貴方たちは」

「気が強い女は持てるけど、強すぎると、厄介なんだよな。男を甘く見てるとヒドイ目に合うぜ」

今度は後方の男B。

「……………」

「ところで相方はどうした？あのヒョロヒョロした男は」

「知りませんよ。どっこのトイレのタイルの数でも数えているんじゃないですか？」

「ふーん。まあ、いいや。あいつには興味はないしな。なあ嬢ちゃん、ここで降参したら俺の彼女になるだけで許してやろう。けど、抵抗するなら、——へへへっ」

目を細めてニタツと笑みを見せる男A。

対して——。

「お断わりします。私からも忠告しましょうか。痛い目に合いたくないなら、降伏しなさい」

橋場リサは変わらない声色で、そう言った。

「ふっ、はははははっ!!」

男二人は笑う。

その笑いは本当に汚く、品の無い。

「いいぜ。讓ちゃん。これで何されても文句は言えないぜ」

「前置きが長すぎますよ。いいから、さっさと掛かってきなさい」

「何を！」

そして二人の男はほぼ同時に橋場リサを襲いかかる。が、しかし――

かちゃっ。

橋場リサは瞬時に刀を抜き、抜刀する。

刃の腹で前方の男の腹部を叩き上げる。

瞬殺である。

戦闘開始、数秒と立たずに男二人の内の一人が口から泡を吹いて倒れる。

「たわいもない」

小声で、そう呟き、身を反転させる。

残った、もう一人の男は啞然としていた。

まさか、こんな小さな体で背より高い刀を扱うことができるとは思っていなかったのだろう。

「なっ！」

口から声を漏らす。

「貴方たちは女を甘く見すぎです」

橋場リサは男Bへと言い放つ。

「貴方は何故に、このイベントへ参加した」

そして問い掛ける。

男は意識が反転していた。体が震えながら口を開かせる。

「おっ、俺たちはただ……あつ、遊びで――――」

「遊びですか？考えが甘い。このルールは殺しもありなのですよ。冗談と思いましたが？笑止！これは冗談でも何でも無い。このイベントは殺したいと思うものと死にたいと思うもの以外は参加は不向き。この意図に気がつかない貴方たちは馬鹿です。愚かです。なんなら、一度死んでみますか？」

かきん！

刃を壁に当てて音が鳴らされる。

「ひっっ！ひいひい！」

男は無残に崩れるように、床に這いつくばった。

「————」。今更命乞いなんてしないで下さい」

橋場リサの刀が男の頭上に上がった。

「さようなら」

「うわあああああ！」

絶叫。

男の悲鳴が鳴り響く。

「ふー。男の癖に這いつくばって、悲鳴をあげるとは————。安心しなさい。命を取るような趣味はありません」

そう言って刀を鞘に直す。男は目を白目にして、意識を失っていた。

「さて、雑魚はどうでもいいです。次に行きましょう」

橋場リサはそう呟いて、その場を後にするのだった。

「百、百とんで一、百とんで二——————ってマジで俺はここに放置なのか！橋場さん貴方は鬼ですか！悪魔ですか！」

俺はあまりの虚しさに大声をあげた。

しかし。

「————」

返答はない。

当たり前だ。何故なら、このトイレには俺一人しかいないからだ。

「てか！最近本当に皆、俺の存在の扱いがヒドイ！何たることだ！

誰か俺に手を優しく差し伸べるような心優しい奴はいないのか——

——」

と俺はいう。

もちろん誰に言った訳ではないので、よって一人ごとになる。

寂しいな————。

「しかも、橋場さんに至っては俺をゴミのように扱いやがる！まあ、橋場さんなら構わないのだが——いや！構わなくなんかない！」

と俺。

もちろん誰に言うわけではなく独り言だ。

あはははっ。

なんだか笑えてきたよ。一人は楽しいな。独り言、最高。
あははっ！

「って！やばい！脳が！思考が！やばい！俺は誰だ！俺は俺だ！なら俺ってだれだ！て本当に誰か反応してくれ！」

俺はトイレの壁をドンドンと叩きながら叫び声をあげた。

誰も返事はないだろうという状況下の中で――――。

もし、反応してくれる人がいれば、おそらく、それはトイレの住民くらいだ。

まあ、そんなのいないだろうけど。

そう思っていると――――。

『いいよ。一緒にお話しようよ』

予想に反して返事が返ってきた。

この通りそうな高い女性の声である。

「――――」

俺は壁を叩く手を止めた。いや、自然と無意識下の内に止めたのだ。

「――――」。えっと、誰ですか？」

恐る恐る少女の声主に問う。

対して返事は直ぐに返ってきた。

『私の名前は佐古下唯』

一度では無く、二度目の返答が返ってくる。

声主は佐古下唯と名乗った。

どうやら本当に誰かいるようだ。妄想では――――おそらく無いようだ。

「えっと、唯ちゃんだっけ？いつから、そこにいるの？もしかしてイベントの参加者？」と俺は唯と言う少女に質問する。

『唯でいいわよ。いつからここにいたって？何言っているの？ずっと最初からいたじゃない？』との回答が返ってくる。

どうやら、ずっといたらしい。

いたか？記憶にないのだ……………。

「ずっと、いたなら判ると思うけど、俺は覗きじゃないからね。女

子トイレに好んで入っている訳じゃないからね」

と、一応念の為に断りを入れておく。

『くすっ、うん。わかってるわ。変な服を着た女性に入れられたんだよね』

どうやら橋場さんの存在を知っているらしい。本当に最初からここに居たようだ。

『あの服装って変わってたよね。何？最近の流行なにかかな？』

どうやら唯という処女はゴスロリを知らないらしい。ゴスロリを知らないとは最近ではめずらしい。

近年ではゴスロリ理解者が増えてきたと思っていたが、まだまだ理解者は少ないのか？このように存在すら知らない人がいるし――。まあ、俺はどうでもいいのだが。

「流行かは解らないけど、一部には人気がたいだよ」と俺は返答。へえーっと高い声で関心の声。

「ところで、ずっとここにいてるって言っているけど。ここで何してるの？」

『ああ、別に居たくて居るわけじゃないから。ここにしか居られないの私は――』

どことなく寂しさがある声で返答。

「なんで？出ればいいじゃないの？トイレにずっと居たら可笑しくなっちゃうよ」

『うん。でも私――――幽霊だから』と唯。

「そっか幽霊か」

『うん。幽霊』

「ん？幽霊？」

『そっ、幽霊』

「――――うわあああああ！」

と思わず大声をあげてトイレの中で尻をついた。

『何？どうかした？』

緊張感のないような声が返ってくる。

「いや、幽霊って!」

また、なんてオカルトな——!」

てか、やっぱり俺の頭は可笑しいのか! 狂ってるのか! もしかしたら、これは夢か? いやいや、これは現実だ! 受け入れる。現実だ。目の前に幽霊。これも現実。————って受け入れられるか!

「本当に幽霊なんですか? 冗談でしょ?」

『うそのような真実ですよ。そんなに慌てて大丈夫ですか?』

「いや、大丈夫ではないですよ」

『そうですか? すいませんね。驚かせて』

「でも唯はどうしてトイレの花子みたいになってるの?」と僕は問う。

『さあ?』と疑問符をつけた答え。

どうやら本人でも死んだ理由が解らないようだ。確かに、何で死んだか解らないなら無事に成仏できないだろう。声からしても、まだ若い。若いうちに死んだら未練も残る。未練があるから幽霊になる。うん、なんて典型的な幽霊なんだろうか。

「唯はいつごろからここに?」

『えっ? いつごろからですか? おそらく、江戸の末期くらいからです』

「江戸!」

『はい』

なるほど。ゴスロリなんか知るはずが無い。知っていたら、逆にすごい。江戸時代がゴスロリは存在していた。って今度の自由研究のテーマになるところだ。

「なあ、ところで一つ頼めないか? この扉を開きたいんだけど、扉の前に何か色々置いてあって開かないんだ」

『はい。机や椅子がたくさんありますね』

どこから持ち出したか判らないが橋場さんは椅子や机で俺を閉じ込めているらしい。

「なら、どけてもらえないか」

『いいですけど、これは契約になりますよ』

「契約？——ん、まあ、どけてくれるんなら、契約でいいよ」
と俺は適当に答えた。

すると嬉しそうな声で。

『はい。なら契約ですよ！なら退けちゃいますね！てか、ぶっ壊しちゃいます！壊れろ！この机！』

つと声と共にガシャ、ガシャという騒音。

「————」外で何が起こっているんだろうか？壊れろって——。

しばらくすると、音が無くなり静かになった。

『はい。完成ですよ』

「……………ありがとう」

俺は礼をして扉を開けた。扉はすんなりと開いてくれた。

そして、扉の向こうには佐古下唯がいた。

「————」

思わず声を失った。

何故なら、唯は着物を身に纏った美女であつたからだ。

綺麗な透き通った目と長い黒髪。

唯一不自然なのは浮いているという点。

「えっと、なら俺は行くけど、ありがとな」

俺は一礼を再びした。

すると、唯は首振って。

『礼には及びませんよ。これは契約なんですから。これからよろしくです』

と頭を下げてくる唯。

「ああ、こちらこそよろし————くって……………何が？」

『だから契約です。私は今から貴方にとりつくことになりました』
と笑顔で言う唯。

「————」

俺は硬嫡する。

そして声にならない悲鳴をあげる。

『ふふっ、よろしくね』

可愛らしく唯は笑うのだった。

第六章

「で————。いつまで僕らは、ここでじっとしていきやならないのかな？」

僕は休校舎一階にある教室の机に腰掛けて一息ついてそう言った。もう、彼此——十分程度このような態勢である。

しかし、こうしていても、ただ今僕は戦闘中。教室は安全だが廊下は弾の嵐である。つまり、この教室から出られないのだ。

そんな状況にもお構い無くに————。

「さあね。私に聞かれても」

まるで興味の無いような仕草を見せながら、深雪は言った。

「他人事だね」

「うん？結構この身に思っているわ」といいつも欠伸でもしてやる気の欠片がまったく見られない様子の深雪。

「はあ————てか深雪は、あのクソ校長のことを良く言うけど何がいいのか僕にはさっぱりだよ」僕はの隣なので、いくつか深雪に質問でもしてみることにした。

「えっ？何？そんなの決まってるじゃない。あのダメ具合が好きなのよ」と平然と言う深雪。

「————」

何がいいのか僕みたいな理解人には全く解らないのだが。まあ、解りたくもないのだけど。

「たぐっ、何が楽しくてこんな変なイベントを開催しているだか。

僕にはさっぱりだ」

僕ははき捨てるような口調で、そう言った。

「でも白沢、そんなイベントだから楽しめる人間もいるのよ。学校行事で人の殺し合い出来るなんて、そうそう無いよ」と楽しそうに深雪。

「はあ————。これで本当に死人が出たら世間的にやばいぞ」

「まあ、そこら辺はミー君がどうにかしてくれるって」

「—————」

僕的には、どうにもしてくれない気がするのだがな……………。

「はあ、確かに参加者も、また可笑しな奴らだし—————」

何で、またマシンガンを廊下で撃ちまくっている学生がいるか？普通通いない。

こんな学園イベントなんて冗談半分で参加している奴らはまだいい。開催前に突っ掛かってきた、さっきの男二人組とかならまだいい。問題はこのように本気になってゲームを楽しんでいる奴ら。つまり本気で彼らは殺しを望んでいるのだ。校長はこんな奴らを求めているのだろう。このように人が人を殺すという動作を楽しんでいるのだ。

まったく————どっちも、どっちだ。

殺しを楽しむ奴らと、殺させて楽しむ奴。まったく下らない。

こんな奴がいたから、このイベントが成り立ってしまったのだ。はあ————とため息をついて、僕は机から腰をおろした。

「さてと、だからこそ、誰も死者を出さないで僕らが優勝しなきゃならないんだよな」

僕はそう誰にも聞こえない程度の声で呟いた。

「ん？なんか言った？」

と深雪が聞いてくる。

「何も」と僕は素っ気ないように返す。

「あれ？白沢どっか行くの？」

すると、教室から出ようとしている僕に再び深雪が話掛けてくる。

「うん、ちょっと害虫駆除でもしてくる」

「ふーん。弾に当たらないようにね」特に気を使っているような気もないが心配の声を掛けてくる深雪。一応、彼女なりに心配してくれているのだろう。

まあ、定かではないが。

「なら、ちょっと行ってくる」

「ほいほい」

深雪の間の抜けた声を聞いた後、僕は教室から廊下に飛び出した。

飛び出して尚も銃撃の雨は止んでいない。

いったい、どのくらいの弾があるのだろうか？

ずっと俺のターンのつもりか？

僕は首を傾げながら弾の軌道を見て捌く。

確かに量は数的に多い。

しかし、まばらに廊下全体に打ち込まれているために避けようと思えば避けれる。

おそらく、これは威嚇射撃にすぎない。

このように廊下全体に撃てば弾を捌いて、突き進もうとする輩はいないと判断したのだろう。

そして、僕らが教室内に待機している時に、もう一人が別ルートで教室まで近づいて僕らを戦滅する。

手に取るように解る戦略だ。

だが甘い。

僕は、こんな弾の雨なんか恐れはしない。

命なんか別に何とも思ってもいいない。

ここで死んだとしても何も思わない。そもそも、死んでしまったら何も思えないわけだし――――。

それに、この程度の段幕なら見て避けることが可能である。どこぞのシューティングゲームのエキストラモードの方が百倍難しい。

後は近づいて接近戦に持ち込んで勝てばいいのだ。楽勝である。

まあ、楽勝かどうかは定かではないわけだが。

あと、問題があるとすれば――――あつ、そうだった。

僕の予想がただしかったら教室に向かっている敵が後一人いるはずなのだ。

そももって、教室には深雪がいて――――。

「――――」

まあ、どうにかなるだろう。

「おっと！危ない、危ない」

今は、他人の心配している場合ではないな。

深雪なら、どうにかするだろう。てか、僕の知ったことじゃない。心配なんかしてやらん。そもそもアイツの所為で、こんな事になっているだ。少しは責任を持つべきだと僕は思う。優勝したいなら、自分の手で一人くらい倒してもらわないと割に合わない。

さてと、廊下も後少しで、終わりになるな。

僕は避けつつ走りながら、廊下を百メートル程度駆け抜けていた。廊下全体に撃たれていた弾も、いつのまにか僕をターゲットに撃たれているようになっていた。

つまり向こうから、こちらを確認できる位置まで来たということだ。

「さてと、そろそろ対面の時間かな」

僕は独り言を笑みを作って呟いた。

「ふう、やっとこれでゴールかな」

僕は校舎の最端であるところまで着いたところでマシンガンによる発砲は止められた。

止めたんではなく、単に弾切れで止まったのかもしれない。

まあ、この際はどっちでもいい。避ける動作をする手間が省ける。

「やあ、初めましてかな。ずいぶんと派手に歓迎してくれた見たいだけ」

僕は重そうなマシンガンを抱えて持っている人物へ声を掛けた。

その人物はとんでもないようなものを見るような目で僕を見ていた。どうやら、かなり動揺しているらしい。

うん——わざわざ格好をつけて、弾を避けてみたかいたったよ。命張ってみたかいたがある。相手のこの驚きの表情が見たかった。――

——なんか嫌な奴みたいだな、僕は——。

まあ、しかし——。

逆に僕もやられたよ。予想外の顔をしてしまったよ。僕も少々驚きを顔に見せてしまった。

何故なら、この人物は女性であったから。それに加えて、僕には彼女が身に覚えがあったからだ。

「えっと———確か永倉さんだよ。下の名前は———ごめん忘れちゃったけど」と僕は彼女を見ていった。

彼女は少しばかり体を震わせながら顔だけを動かして相づちを打ってくれた。

どうやら永倉さんで合っているようだ。

よかった、よかった。違っていたら恥ずかしい。

僕は内心で身を落着かせた。

ちなみに僕が何故彼女の名を知っているのか。

それは簡単な理由。彼女は三年の女子で、この学校の生徒会副会長であるからだ。

故に僕は彼女の名前と顔を知っている。生徒集会などで、よく顔も見ている。

まあ、面と向かって話すのはこれが初めてである。よって、彼女からしてみれば僕の存在なんか知れたものではないだろうが。

「意外ですね。なんで貴女みたいな人がこんなくだらない遊びに参加しているんですか」と僕。

永倉副会長は、困った顔を一瞬浮かべたが、ふっと笑みをを見せて口を開いた。

「何でと思います？ 白沢朝奈くん」

永倉副会長は微笑して言った。対して、こちらはまたも驚いてしまった。

「何で僕の名前を？」僕は不思議に思ったので、尋ねる。

それに対して、返答は

「副会長ですから」と解りそうで、解りずらい返事が返ってくる。

「まあ、僕の名前を知っているようがいまいが、別に大した問題ではありません。で、貴女の参加目的はなんですか？ 僕のような煩惱で

は全く解りかねませんので」

何で生徒会の彼女がこの馬鹿げたものに参加しているのか？理解がしたい。

「自分の力を低く考えのようですね」と返す永倉さん。

「低いですから——自身を持つことなんてしませんよ」

僕はそう答えると——。

くすっ。っと笑い笑みを見せる永倉さん。

何だか、よく解らない人だ。やりにくい。

「まあ、私の参加理由なんてものは既に貴方の賢い頭を使えば解っているではありませんか？」

「僕はエスパーでも何でもないので正解を当てることなんかできませんよ。考えはできるけど、その考えが当たっているかどうかなんて解らない。考えるのは誰にだってできるでしょう？それに僕は煩惱ですから」

それを聞くなりに永倉さんは笑みを見せてニコツと笑う。

うわああ……なんだこの人？まじで相手にしにくい。

「なら私が答えましょうか」

自分の胸に手を添いて軽く会釈をして話をし始める永倉さん。まるで、どっかのお姫さまのような仕草である。深雪にも見習ってほしいものだ。そこで少し深雪がお淑やかで優しく、可憐であつたらと考えてみよう。

—————。

ぐっ！ぐうう！ぐうれいとおおお！

うん、うん。最初は見慣れないかもしれないけど、これはこれで好いかも。

———。まあ、妄想はこれくらいにして永倉さんの話を聞こうではないか。

僕は我に返り、耳を傾けることにした。

「私の参加の目的って言うものは、別に特別な意味合いなどないのですよ。校長先生さんが仰った通りです。気晴らしです、気晴らし。

生徒会と言うのは少々肩に重荷がかかるのでたまには発散しようか
と思っただけですよ」

笑顔である。永倉さんは笑顔でそう言った。

「そうですか——」と僕。

「はい」笑顔の永倉さんが答える。

「もう、発散できましたか？」

「はい」永倉さんは尚も笑顔で頷く。

「でしょうね」

「——」

「誰のだか知りませんが、血を浴びすぎですよ」

「——」

僕がそう言うのと彼女の笑顔は亡くなっていた。とても荒い表情になる。

「——」。

どうやら——既に遅かったらしい。僕が誰も死人を出させないよう
に終わらせるつもりだったのに。

彼女は初めから、人を殺すつもりで参加していた。

「後ろに隠している生首は誰のですか」

僕は変わらない口調を維持したまま問う。

「——」

眉をぴくつと動かすだけで特に動きを見せない永倉さん。

「ああ、また問題ですか？なら当ててみましょうか？それは生徒会
会長さんの首じゃないんですか」と僕は言う。

「——」

再び眉が動く。

しばらくは沈黙であった。沈黙。そして——。

ふっ。と口元が緩む。

「明答ですね。正解ですよ。すばらしい」

笑みを作って、隠していた首を体の前に持ってきて、こちらへと見
せた。

ここからではよく判断できないが、男の顔で首綺麗に切り取られている。傷口からは血はあまり流れていない。凝血している。死後およそ二時間程度はたっている。

つまり、ゲーム開始から間もない。

「最初から殺すつもりでしたね」

「ふふっ、煩惱なのにすごいですね」

永倉さんは不気味に口元だけの笑み。

「感ですよ。感が繋がれば真実に辿り着けるんですよ」

僕はどこかの探偵のような台詞をはいた。

「どこの探偵の真似ですか？」と普通につっこまれてしまった。

「この人は私の処女を奪った人なんですよ」

「————」

永倉さんとはんでもないことを口にして話始めた。

「私が副会長になった週でしたかね？この会長と書記の二人にやられちゃったの————」

「————」

「それから一年近く、強姦の毎日よ。二人だけだったのが、いつのまにか生徒会男子全員。他にも女子の生徒会員はいたけど、あの娘たちは私を見てみぬふり。最初は明るく振る舞おうと思って、明るくしたわ。明るく、明るく————。でも人は限界はくるものね。いつしか、私は壊れていた。あの人たちを殺そう、殺そうと計画して。————でも実行に移せなかった。だから、このゲームは好い機会と思ったの。ほら、私を犯した人たちを今度は私が犯した、侵した、冒した、殺した」

笑いながら、僕に見えるように死体を見せる。

死体の数は四つ。

「————」僕は何も言わない。

「ふふっ、急に何も言わなくなるのね。まあ、いいわ。ごめんなさいね。知ったからには生かしてられないの」

くすっ。と笑いこちらに拳銃を向ける。

そして笑顔のまま。

「ばいばい」

そう言って永倉さんは引き金を引いた。

ばんっ！

「――」

目の前、十メートル付近で弾は僕を目がけて発砲された。

普通ならば確実に当たる距離である。

しかし、どうやら今日は調子がいいようである。弾の軌道を完璧に見切って弾を避けることに成功。

倉原さんは驚きの表情を見せる。

しかし、一番驚いたのは意外に自分自身かもしれない。何故ならもともとの自分の身体能力は高い方ではあったが銃の軌道を見切れたり、避けたりできるほどは良くはなかった。

そう、普通なら見切れなかったはずなのだ。なのに今さっきのように、弾を避け続けながら何メートルもの廊下を走行し続けたかという――。――。

原因はおそらくアイツであろう。

僕の身体能力が著しく上がったのは入学して間もない日のある事件でアイツ――紀村深雪に治癒を受けてからである。

なんで、そうなったのかという詳しい話までは、よく解らない。

だが、あの時以来から僕の体は異常体へと変化したのは間違いない。

まあ、もともとから異常体ではあったのだが……………。

まあ、しかし別に大した問題ではない。むしろ逆である。後遺症が負ではなく、この場合は正に見えていいだろう。

「っ！」

永倉さんは構えたままの状態から2発、3発と発砲を行なう。

2連打となり銃声が響き渡る。

しかし、こんなもの当たってやれるほど僕は落ち着いていない。軽々しく身かわして見せる。

「っ！」永倉さんの歯を噛み締める姿がとってわかるように思われる。

「この化け物！」

永倉さんは僕に向かって、乱暴にそう吐き捨てる。

「化け物？ふっ、そうかもしれないね」と不敵な作り笑いを見せる僕。

「なんで避けれるのよ……絶対異常だわ！」

どうようを顔に見せる永倉さん。対して、僕はそんな彼女を見て鼻で笑う。

「ふっ、面白いことをいいますね。全てが思い通りにいくわけがないじゃないですか。異常かと思うかもしれない。ですが絶対なんて言葉なんて無いんですよ」と僕は言い放つ。

「っ——」

すると永倉さんは歯を噛み締めて押し黙った。

「まあ、貴女は別に悪くはなかった。悪いのはどちらかといえば、その死体でしょうね」

「——」。同情のつもりなの？」

「いいえ。まったく、全然そんな気はなってないです。こんなことを言うのはなんですが、犯されたからどうしました？僕にとっては何の同情もしませんよ。そして、同情できないからこそ僕は貴女をただの殺人者にしか見れませんね」

つまり彼女は僕にとって同情に値できない。同情なんてできやしない。

実につまらない。

嫌なことをされたから殺しました。

彼女がやっていることは、こんなことに代わりはない。

馬鹿げている。嫌なことをされたから殺す。訳が分からない。

世の中嫌なことなんか何万、何億とある。

僕は校長が嫌いだ。なら殺していいのか？いや——違うだろ。

僕は橋場さんから殺されようと何度もされかけた。なら殺していい

のか？

それも違う。

僕は———世界が死ぬほど嫌いです。

なら、この世を消し去ってしまうのか？

—————。

「僕はね。このくだらないイベントでくだらない理由をつけてくだらない奴をくだらない殺し方をしたきみがくだらなく、うっとおしく感じてしまう」

実に—————。

くだらない。くだらない。くだらない。くだらない。くだらない。

くだらない。くだらない。

実にくだらない。

「きみの理論からすれば嫌と思った奴は全員殺しちゃっていいんだろう？」

僕はそう言って永倉さんを見て笑ってみせた。

永倉さんはガタガタと震えている。

ああ、実にくだらない。死ぬのが恐いのか？人を何人が殺しておきながら……………。いまさら自分の命が惜しいのか？

「貴女は一度死んでみたほうがいいかもしれませんね」

「ち、ちょっと待ってよ！さっきから貴方の言っていることはおかしいわ！被害者は私なの！私！私はただやりかえしただけよ！」

自己主張を訴える永倉さん。

しかし。

「ふっ—————そんなだから貴女は死んだほうがいいんですよ。ナンならあと一つ理由をつけとくします。貴女は僕の計画のじゃまをしたんです。こんなイベントなんかで死者なんかだして————まったく、くだらない」

僕はそう言って睨むように彼女を見た。

「な、何言っているの！このイベントは殺してもいいんでしょ！だから私は殺したのよ！それに、この男たちもそれが目当てで参加し

は半端なく高い。

どうやら今回は僕としたことが認識が甘かった。まあ、やる気があまり無かったのもあるが――――。

「だったら貴方も私を殺してはならないはずでしょ！」

永倉さんはそう主張を述べる。

僕は溜め息をついた。

彼女の頭には自分のことしか既に入っていないようだ。殺してしまった人の償いよりも、自分の命。

まあ、社会的には利口と言えるかもしれない。が――――ときには立派過ぎる社会性は命とりということを彼女は知らないのであろうか？

「ねえ、知ってるかい？ 人には二種類あるんだよ。人に従い決まったルールの中で生きる人。まあ、それが大抵の人のありかたでもあるね。そして、もう一つはルールに掟われない生き方をする人だ。所謂、自由。でだ、僕は後者であるんだよ。ルール？ そんなもの生まれてからあっても無かったようなもの。だからね――――」

僕は永倉さんを見て笑った。

「人を殺しても自己責任。ルールなんてないからね。だからルールなんて効かない」

「なっ、なにを言っているの――――白沢くん」

「副会長なら頭いいはずだね。自分で考えなよ」

そう言って、僕はポケットから愛用のナイフを取り出した。

「さようなら――――」

僕は永倉さんに駆け寄った。

「こっ、こないでえええ！」

絶頂。絶叫。

ばんっ！

銃声音。

しかし、僕の体と弾は交差する。

「――――」

「――」

そして――。

永倉副委員長の首と体は二分された。

つまらない。

そんな小言が流れたあと、静かな休校舎の廊下へと変わった。

「貴方は別に悪くないのかもしれない。でも――僕の気が悪かった。僕を怒らせてしまった。残念ですね。折角、嫌いな人達と別れることができたのに、また一緒です。地獄という場所で――。貴方みたいな人は一生犯されてたほうがいいのかもしれないね」僕は口元だけの笑みで笑った。

「はあ……………」

深雪は一人教室の机の上に乗っかり溜め息をついていた。

「はあ……………。ふう……………。はあ……………。――
――暇」

ぼつりと言葉を漏らす。

そんなこんなをしていると今いる教室に接する廊下で、今まで嵐のように発砲されていた銃声音がなくなった。

「ああ、白沢がんばってるなあ――」ぼそつと独り言のように感想を述べる。

しかし、反応はない。ただ今、この教室には一人。

「ああ――暇」またも同じ事を連呼した。それほど、深雪は暇であった。

「まあ、いいや。退屈しのぎに、その窓の向こうに隠れている君が出てきていいよ」

そして、やる気の無いような口調のまま、そう言った。
しかし、反応はない。

「ああ、もう判っているから。隠れていても意味無いよ。出て来な

よ」

――。

一瞬、教室は静かになる。そして、深雪のいったように窓際から物音をたてて学生が一人姿を現した。背の高い男性であった。

「何で隠れているとわかったんだ――？」

曖昧に困ったような顔をして男は言った。

「いや、別になんとかなく――」

「なんとなく？」

「うん、なんとなく」

深雪は表情ひとつ変えずに出てきた男に対応する。

「うん、うん。こっちに敵一人で向こうにも一人か――」。なるほどね」

深雪は納得したように顔を頷いてみせる。

「貴方もイベント参加者でしょう？相方は？」

「今頃、ちょうど君の相方と交戦中だろう」

「そっか。なるほど。貴方は何でイベント参加してるの」と深雪。対する男はめんどくさそうな顔をして――。

「何ででもいいだろう。それに聞く必要の無い質問だ。何でって、そりゃあ決まっているだろう？人を殺してもいいゲームなんてそうそうないからな。大抵のやつはそういうスリルを楽しむために参加しているんだ。俺の相方もそうだ。まあ、アイツとは別に好きで組んでるわけじゃないが、二人一組だからな。都合上に合わせて手を組んでいるんだ。まあ、アイツのおかげで、もう四人も殺れたからな」

楽しそうに笑みを見せて語る男。

「ふーん――」と深雪は尚も表情一つ変えないで男を見ていた。

「何が楽しいのか、さっぱり」

「そうか？普段はできないだろ？人を殺すっていうスリルや感触がいいんだ。おまえには判らないのか」

「判らないわ。私は別に人を殺したくて参加しているわけではないから。ただ一番という肩書きが欲しいだけよ」

深雪がそう言うのに対して男は笑う。

「ははっ、そうかい。だがこれは遊びじゃないんだよ。残念だが一番は俺のものだ」

男は既に勝ち誇りきった表情を浮かべる。

「はあ？何言っているのかしら？貴方の負けは決定してるのよ」

「誰だか知らないが、女、なかなか面白いな。だがこれが何か判るか？」

男はニタニタと笑いながら拳銃を取り出す。

何がそんなに面白いのか？深雪はそんな表情を浮かべている。しかし、動揺したり焦りの顔は少しも見せてはいない。

「ほう、顔色一つ変えないとはな————最近の女は変わっている」「そう？」

「ああ——」。女、よかったら命を助けてやろう。代わりに俺の女にならないか？」と、なんとも馬鹿みたいな言葉を吐く男。

「ふふっ——」。貴方、頭おかしいよ。笑わせないで。私が貴方な人かと？調子に乗るのもいい加減にしなさい。私は貴方のような雑魚にはようはないの。雑魚で三流にもなれない雑魚みたいな男にはね。私が愛するのは、ただ一人。白沢朝奈よ」と満足気に笑いながら述べる深雪。

「なっ、なんだと！」

「すぐ切れる。馬鹿みたい」

「くそっ！てめええ！」
ばんっ！

銃の引き金を引いて、弾が深雪に向かって発せられる。

しかし、深雪は顔をひょいと傾けて弾を見切る。

男はこれに対して驚きの表情を一瞬見せるが、後はもう自棄顔となる。

「死にやがれ！」

大声と共に二度目の射撃が行なわれようとする。
が――――。

「まてええい！」

間に割って入る声で男の動作がとまる。

深雪、男、両者共に声の発された方を見る。

そこには――――。

そうお待ちかね！愛と正義の学生！須原滝が立っていた。

ああ、俺最高。まじ、かけええ！

と思わせる演出なのはずだが――――。

「――――」

「――――」

二人は啞然として、場は凍っている。

「紀村さん！もう安心！なぜなら俺が助けに来たからね！」と滝。

「――――」

しかし、紀村さんは無言である。

あれ？場を出間違えたか？いや？あれ？おかしいな――――。

そんな少々戸惑う俺に――――。

『えっと、滝くん』と後ろにいる女性、幽霊の唯ちゃんが話かけてくる。

『どうやら邪魔のようですよ』

「なっ！邪魔！」

そんなことが、そんなことが――――。

「あってたまるかあああ！」

そう言って特功する！

いかにも敵オーラを出している男にだ。

しかし。

ばしっ、どすっ、ずどっ！………………。

3秒でノックアウトされる俺。

「ぐわあああ！」

ばたんっ！

「————」

「————」

紀村さん、男はしばらく、また哑然としていた。

ああ、さすが敵。いままでで一番の強敵だよ！まつ、こいつ一人しか戦ってないがな。

ナイスファイトだ————。

そして須原滝の意識は無くなった。

無くなる前に『滝くん、格好悪いです』と唯ちゃんの声が聞こえた。

滝が倒れた後、しばらく無言の態勢が二人の間で起こっていた。

「あーあ、こいつがお前の相棒か？」と男。

「見覚えすらありませんね。初対面です」と深雪。

「まあ、いい。少し拍子が抜けてしまったが、お前の命はもう最後だ」

と再び同じ状況となる。

「戯言はいいから、始めましょうか」

深雪がそう言うのと男は銃の引き金を引いた。

ばんっ！ばんっ！

2発の弾が発射される。

が、深雪は発射と同時に身を動かし、教室から廊下へと走りだす。

「逃げるつもりか！」

そう言って、追うように男も教室から出る。

逃げるつもりは、まったくないんだけどね。っと深雪は呟く。

ばんっ！

深雪にとっては後方からの射撃。

しかし、後ろはいちいち見なおさない。左右に体を揺らしながら廊下を掛け抜ける。

弾は標的から逸れて壁に当たる。

そして深雪は、そのまま廊下から階段を駆け上がる。無論、男は後

を追ってくる。

ばんっ！

走りながら男は尚も発砲する。

しかし、大きく的を外す。どうやら男の腕前は凡人並である。全くと言っていいほど腕が立ってない。

しかし、深雪はフロアを二階に変えても尚も逃げる。そして一番廊下端まで走りようやく足を止めた。

「はあ———粘るのもはもう終わりか？」

少し息を切らした様子で男は言った。

「逃げる？」

深雪は何がと言わんばかりに顔を捻らせた。

「貴方の負けよ」

と蔓延の笑みを見せて言う。そしてポケットから銃を取り出した。これは先程拾った奴である。

「ほう、女。お前にそれが使えるのか？」と舐めたような口調で男は言った。

「まあ、貴方よりは使えるわ」と深雪はそう言って———。

ばんっ！

引き金を引いて、弾を撃つ。

弾は男の顔スレスレを通っていく。男の顔からは薄らと血が流れる。

「———」

男の顔から血の気が引いた。

「どう？ なかなかの腕でしょう？」

くすつと笑いを見せる。

「なっ———」動揺を隠し切れずに声にした言葉もならない。

「だが———しかし、お前に俺を殺せるか？」

「ふーん、以外と度胸はあるようね。私をためそうっていの。ま

あ、いいわ———」

深雪はそう言うのと銃口を男に向ける。

「———」

辺りは静かになる。

男の顔は険しく、余裕の無い表情。額には汗が見られる。

「――」

そして――。

深雪は銃口を――――――――――引かなかった。

「――」

弾を撃たず銃をおろす。

「はっ、ははっ！はははは！やっぱり人を殺すのは怖いカ！」

男の顔は一変して笑顔に変わる。そして、今度は男が銃を構える。

「はははっ！何か言い残すことはあるカ？」

「――」。さようなら」と深雪はぼそつと言う。

「さようなら？ああ、ならさようならだ！」

男は嬉しそうに歓喜した口調で、そう言って――――――引き金を引いた。

かちやつ………。

――。

しかし――――。

弾は出てこなかった。

「なっ、なに！」

驚きを口にする男。

「ふふっ、ふふっ、ふははははは」今度は笑い返すように深雪が高々と声を上げた。

「まったく茶番よね。茶番。自分の銃の弾くらい把握しなさい。さてと、もう終わりにしようかな。さっさと白沢のところに行つて誉めてもらわないと。白沢ももうおわっているころだろうしね」
深雪はそう言った。既に勝ちを認定したような顔をして。

「なっ、何を言っているんだ！俺はまだ――――」と言葉を発している途中だが。

かしゅん！

刀を抜く音が鳴り響く。

そして――。

「もう、終わりです。貴方の負けですよ」と声が男の背後で発せられて――。男が振り返ろうとしたが、その時には――。がつん！

「うっ！――………」

刀裏で腹部を強打されて、男は崩れ落ちた。

「――――」

………。

「はあ―――ありがとねリサ」深雪は刀を持った少女に話掛ける。「あんな無茶な戦いまともに見てられませんから」と男の崩れた上に立つ、橋場リサはいう。

「たまたま通りかかったの運のつきですよ。怪我は無いですか」凜とした声で尋ねてくる。

「あっ、くっ―――」

すると、深雪は腹部を押さえて崩れるように丸くなった。

「大丈夫ですか！」

橋場リサはとっさに深雪へと駆け寄った。そして気を使うように顔を覗き込む。が――。

「なーんてね！食らえ！」と深雪は身を起こし、橋場リサのみぞおちにパンチをどすつとかました。

「えっ、なっ！ぐはっ――――――」

そして橋場リサの意識も無くなった。

「はっはっはっ！敵も味方もないのよ！サバイバルだからね！リサごめんね、だけど私が一番なんだから！」

そして、しばらく笑い声があがった。

「さあーて、早く白沢に会いたいな」

そして、月に一度の学園イベント。戦え！サバイバルバトルは幕を閉じた。

エピローグ

あれから二日がたった。

今では再び僕らは学校生活の中で普通の日々を過ごしていた。

あんなでたらめな出来事が通り過ぎた後でも、以外に僕らは普通の日々を普通に送ることが出来ていた。

てか、僕の頭には既にあの日の記憶から消えていた。消し去っていた。

しかし、消えていた記憶なのだが、深雪が話題を再び振ってきたために嫌々ながら記憶を取り戻す。

「はっはは！ 私たち優勝だよ！ 優勝！」

深雪は笑顔で優勝の文字を連呼していた。

今は放課後で場所は、いつものように屋上である。

ちなみに、結果からして第一回学園イベントの優勝は僕と深雪になった。

故に深雪はと言うと——。

「はっはっは！ 一番！ 一番！ 次は日本一をめざすわよ！」と——
——このありさまだ。日本一って桃太郎にでもなるつもりであろうか？

「ほら、白沢ももっと喜びなさい」と深雪。

「お前は喜びすぎだ。二日前の出来事を今さっきのようにはしゃぐなよ」

「何言ってるのよ！ 思い出は大切なのよ！ 思い出は体と共について言うじゃない？」

「都合よく言い換えるな。思い出は心の中にだろ」

と僕は普通につっこみを入れる。

対して深雪はあれ？ そうだったけ？ と笑顔で言っている。

全く呑気なものだ。

結局、前日の出来事は死人の出た事件になっていた。しかし、警察

など国から取り調べが下らなかった。

それは何故かと言うと、どうやら裏で色々と危ない組織が絡んでいたことが明らかになった。無論、これは秘密事項であり、公開されてはいない。

えっ？ 僕が何故、知っていたのかって？ さあ？ なんだろうな。――

――。

だが死んだ奴らの処理がどうなったのかは、よくわからない。

一般に公開されたのは死者はゼロとだけである。

まあ、実際には死者は五人。内一人は僕が殺している。

それなのに何事もなく優勝の肩書きを抱え上げているのが不思議なくらいに異様である。

あっ――。そういや、僕はイベントが終わって、表彰式が終わった後に校長と会話を行なった。

「ああ、白沢朝奈くんだね！ 優勝おめでとう」

「――」

校長は握手を求めてくる。僕は、その手を握らない。しかし、向こうから無理矢理手を取ってくる。

「ほら！ おめでとう！」

「――」

手をぶんぶんと揺さ振るように振らされた。

「なんのつもりですか――？」と僕。

「何のことだい？」と校長は白々しく首を傾げさせる。

「――」。なら、何の目的でこんな馬鹿みたいなことを行なったんですか？

「馬鹿なこと？ うーん……きみには馬鹿に見えたかい？」

「少なくとも良くは見えなかったですがね」

「そうか。そうか、どうやら自分に制限をかけて生きれる人間のようだ。――。でも、つまらない世の中で自分を押さえられ無い人もいるんだよ。きみのようにはなれない人もいるんだ。だから、

こんな馬鹿でくだらない中でも輝きを欲したい。欲するあまりに周りが見えない。人を殺しても、輝きを見せる。欲望の果て——

「————」

僕はしばらく間を取って考えて見せて——。

「判りかねませんね」と返す。

「では深雪が先に行行って待ってるんで失礼しますね。待たせると、うるさいんで」と会釈をして横を通り過ぎる。

すると————。

「ふふっ、きみはこれからいそがしくなるよ」と通り過ぎる間際に校長は僕にそう言った。

僕はそのまま足を止めずに歩き去っていった。

これが僕とあのクソ校長の初めての会話であった。

「白沢？」と名を呼ばれて我に返る。

「どうかしたの？」と深雪が僕に言ってくる。

「さあな」と僕。

「何それ？おかしな白沢。まあ、おかしいのは前々からだけど」

「喧嘩うってるのか？」と僕が言う。

「売ってるんです！」と屋上の扉が開き、橋場さんが登場。いやはや、忙しいな橋場さんも————。

「私はあなたに優勝は譲りましたが、勝負には負けてません！何故なら！イベント中に私は白沢さん！貴方と勝負をしてないからです！」と橋場さんは荒れている。あんまり荒れてるとスカート捲れるよ。と言いたいと言えない。

「ああ、でも作戦勝ってことで僕の勝ち」と僕。

「なっ！策とは卑怯な！おのれええ！公明！」と橋場さん。

このごろ橋場さんもいろいろのキャラになってきたなと僕は関心。

「とにかく！またリベンジマッチをしてもらいますからね！」と橋場さんは言い捨ててどっかに消えていった。

「――」

「白沢もてるわね」

「そうか？」

「でも、私が一番愛情たっぷりだけどね」

「――」

「愛してるわ白沢」

「――」

と日常に再び戻っていく僕らの生活。

日常の中で恨みや、憎しみ、欲望、好奇心――さまざまな思いが生まれては消える。

校長の言った意味はよくわからないが――僕らは、もうかしたら殺し合うことでしか生み出せない生きものなのかもしれない。でも――。

僕は――。

僕らは――。

この空の下で。

この空の果てで。

「あっ、ところで須原くんは？二日前から会ってないんだけど」と思いついたように尋ねてきた。

あれ？滝？

――。

「――知らん」と僕は答える。

滝の心配なんて考えているだけ無駄だな。僕は少し微笑して再び空を見上げた。

「はっ！ここどこだ！」

俺は目を覚ましたときには休校舎は静かになっていた。

『あつ、滝くん。やっと目覚めましたか?』と目の前には退屈そうな顔の唯。

「今いつ?」

『あれから二日後です』

「なっ! 何で誰も起こしに来てくれないんだ!」

『さあ?』

「って二日? 二日後————ってことは今日テスト————! 今何時ですか!」

『四時半です。もちろん夕方ですよ。追試決定ですね』と可愛くガツツポーズをとる唯。

「て! あんまりだあああああ!」

休校舎での叫び声は校内中にしばらく響き渡っていた。

エピローグ（後書き）

『赤色の空の果て2』2巻目である赤色の空の果てももう終わり。おかげさまでアクセス数も2千近く上がりました。今からは夏休みです。僕はこの夏休み中にもう一作新連をしようと思います。よかったら、そちらな方も見てくれたら嬉しいです。あと、感想を書いて頂けると山中のやる気が3ポイントアップします。笑。。では、また。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1492c/>

『赤色の空の果て2』

2010年10月28日05時38分発行